

一般財団法人日本アジア振興財団（JAPF）

2019年春期インターンシップ論文集

期間：ベトナム・カンボジア 2019年2月17日（日）～2月28日（木）

カンボジア 2019年3月3日（日）～3月10日（日）

対象国：ベトナム社会主義共和国・カンボジア王国

参加人数：46名

男女内訳：男14名、女32名

国籍：日本45名、韓国1名

参加大学：高知大学、京都外国語大学、名古屋経済大学、椙山女学園大学、関西大学、愛媛大学、中京大学、龍谷大学、徳島文理大学、同志社大学、津田塾大学、早稲田大学、立教大学、愛知県立大学、岩手大学、獨協大学、南山大学、大分大学、福岡女子大学、北九州市立大学、名古屋市立大学、神戸学院大学、摂南大学、中央大学、東京農業大学、麗澤大学、下関市立大学、九州大学

帰国後の活動：

・関西修了式

日時：2019年3月26日（火）14：00～15：00

場所：在大阪カンボジア王国名誉領事館

・関西事後研修会

日時：2019年3月30日（土）13：00～17：00

場所：日本アジア振興財団事務所（大阪）

・関東修了式、事後研修

日時：2019年3月26日（火）14：00～18：00

場所：JICA 地球ひろば

・福岡修了式、事後研修会

日時：2019年3月26日（火）14：00～18：00

場所：博多リファレンス 駅東ビル



一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

発行：一般財団法人 日本アジア振興財団学生委員会



【貧困とは】

高知大学 人文社会科学部 3年生

私は今回の2カ国インターンシップ型スタディツアーに参加したことで、貧困に関する考え方が変わった。このツアーに参加する前は特にカンボジアは貧しい国という勝手なイメージを持っていた。しかし、実際は本当に貧しいという人々はほとんどカンボジアにはいないという事実をSUI-JH0の浅野さんがおっしゃっていて正直驚いた。私はそれまで貧しい国への募金と言えば真っ先にカンボジアのイメージがあり、幼い頃にカンボジアの子供たちのために学校を作るためのプロジェクトを行うテレビ番組も見ていて、それらの印象から私の中でカンボジアは貧しいというイメージがずっと定着していた。それから私はいろんな研修先や街中を見る中で貧困とは何かと考えるようになった。

貧困というのはどこからが貧困といえるのかその線引きが私にはよく分からなかった。食事が満足に食べられないことか、仕事がないことか、とさまざまなことを考えたが私はその国や人によって幸せが違うように貧困も違うのではないかと思う。日本で考えてみると仕事があり、食事も満足にできるという幸せはどちらかという将来、先のことを考えて行動するアリの思考の人間が多いのではないかと考える。一方でカンボジアの人々はその日その日のことをまず考えて行動し、日本人のように先のことを考えて行動するというよりは今を全力で生きているキリギリス思考の人々が多いのではないかと感じた。

アリとキリギリスはどちらがいいのかと考えたとき、どちらにもメリットやデメリットがでてきた。まず日本人に多いと思われるアリのメリットとしては将来安定が考えられ、デメリットはストレスを抱えると考えた。将来のためにこつこつと働くアリだが先のことを考えるあまりにストレスを抱え、その日その日を全力で生きていると言えないと感じる。一方でカンボジア人に多いと思われるキリギリスのメリットとしては人生を楽しむことができると考え、デメリットはその日その日だけのことを考えて生きているために将来が見えないと考える。これらの結果からアリかキリギリスかどちらかの社会は成り立たないのではないかと考えた。どちらも必要な存在であり、ただ日本ではアリでない生きづらい社会である、それだけのことではないかなと思うようになった。

これらから生き方にマニュアルはなく、人それぞれさまざまな生き方があることをこのツアーで学んだ。アリかキリギリスかどちらの生き方が良いかという正解はなく、その国の社会なども大きく影響しているなど考える。私の中で貧困とは何かという疑問が生まれたことで、普段では気づかないようなことに触れることができた。私にはまだまだ知らないことが多く、その国のことを知っていくことも支援の一つではないかと思うようになった。カンボジアの現状を貧しいという言葉で終わらせては、何が本当に必要なのか私たちに何ができるのかわからない。知った上でも私たちにできることは少なく無力さを感じたが、本当の支援をするためにはまず知ること、勉強が大切なのではないかと考える。

【出会いと学び】

立教大学 文学部 1年生

今回のスタディーツアーでは、日本では見ることでできないものを見たり、体験することができないことをしたことによって、新たな視点や知識を得ることができた。

研修中、戦争証跡博物館を始め、戦争をテーマにした施設を訪問する機会が多くあった。そこには、戦時中実際に使われた兵器や当時の様子を写した写真などが展示されていた。事前学習の段階では他人事のように感じていたベトナム戦争が、リアルに感じられた。これらの研修先に行って学んだことは、戦争を知らない私たちが、戦争を体験することの重要性である。今でも戦争や紛争は終わることなく、繰り返し世界のどこかで起きている。その理由の一つに人々の記憶が薄れてしまうことがあると考えた。博物館は訪れた人が戦争を体験することによって、自分事のように感じてもらう役割を担っているのではないかと考えた。そして人々がそれぞれ抱いた不快感を共有することによって、戦争を二度と起こさないようすることが平和につながるのではないだろうか。

また、見るだけではなく、ガイドや引率の方のお話のなかにも新たな発見が多かった。一番衝撃を受けたのは、トゥルースレン収容所でポール・ポトについてガイドさんに質問した時、「それについては答えられない」と言われたことである。日本にいとあまり言論の自由が保障されていることを意識しないが、それが制限されている国に行ったことによって、いかに日本が恵まれた国であるのかということを実感した。また、引率の方から聞いた孤児院ビジネスの話も衝撃的だった。何の悪意もなく子どもたちと接したとしても、その孤児院の実態について十分に情報を集めていないと、知らない間に犯罪に加担していたり、子どもたちやその家族を傷つけることになってしまうのだと知った。

これら1日の活動の後には、毎晩テーマに沿ってディスカッションが行われた。4、5人のグループで話し合ったのだが、それぞれ異なる意見や考えを持っており刺激を受けた。出身地によって異なった意見が出たこともあった。参加者が全国各地から集まるこのツアーでしか経験できないことだなと思った。また、テーマを大学で専攻していることと関連付けて考えた人もいて、専門的な知識がなくても、自分の身近なところから考えていく方法を学んだ。自分には無い視点や考えを聞いたことによって、知識の引き出しが増えたとし、大きな視点で物事をとらえることができるようになった。視野を広くとることの大切さを学んだ。

今回のツアーで様々な研修先を訪問したことによって、普段は触れることのない分野についても考える機会があった。事前に得た知識と実際に見たことを結びつけ、そこから生まれた疑問を解決していくというサイクルを確立することが重要だと思った。また、ディスカッションを通して、日本とベトナム、カンボジアを対比して考える機会が多くあった。その際に実感したことは、自分は日本で20年間生きてきたにもかかわらず、日本についてよく知らないのだということである。ベトナム、カンボジアについて様々な角度からアプ



ローチしたことによって日本に目を向けるきっかけとなったこのツアーは、私にとって学
びの多い充実したものとなった。

【本当に必要な支援とは何か】

岩手大学 人文社会科学部 2 年生

私は、今回の 2 カ国ツアーに参加して、自分の中のベトナム・カンボジアをはじめとする発展途上国に対する考えが 180 度変わった。それまでの私は、発展途上国に対して「貧しい」というイメージが先行し、まだまだ先進国からの「支援」が必要であると思っていた。しかし、このツアーで毎日様々な研修先を訪れて話を聞き、現地の方々と関わるたび、ベトナムやカンボジアは本当に貧困なのか、本当に必要な支援とは何か強く考えさせられた。

まず、ベトナムやカンボジアは本当に貧困なのか。たしかに、経済発展は日本に比べてまだまだ成長の余地はあり、特にカンボジアでは都市部を離れると道が整備されていなかったり、農業を中心とした質素な暮らしをしている人が多かったりと、物質的な「貧しさ」はあるように思える。しかし、そこで暮らしている多くの人々は決して「貧困」には見えなかった。カンボジアの人々は、とても生き生きと生活しているように見えたとし、一日一日を楽しみながら大切に生きていくように感じた。これが「精神的な豊かさ」の根源なのではないかと考えた。日本人は、学校や仕事に行くのが当たり前の世界で、ほとんどの人が毎日決まりきった生活をし、KURATA ペッパーの倉田さんが言うように、日本の社会の中で「生かされて」いる。それとは対照的にカンボジアの人々は、勉強をすることに対する喜びや楽しさ、意欲やモチベーションを持っており、国内の 80%以上が 2 か国語を話せる、2 か国語が話せないと働けないという状況の中、学ぶこと、働くこと、生きることへの必死さを感じられた。カンボジアの日本語学校や孤児院、農村などを訪問して、そこで学ぶ生活する人々の勉強に対する意欲、知ることに対する喜びや好奇心に感銘を受けた。これは現代の日本人には薄れてしまったものであり、この「精神的な豊かさ」がカンボジアを「貧困」と感じさせない要因であると考えた。

次に、ベトナムやカンボジアにとって本当に必要な支援とは何なのか。今回のツアーではそれぞれの研修先で平和・医療・産業・社会問題など様々な分野について学んできたが、あらゆる分野の課題の根源には、教育の問題があると私は考える。私たちは、ベトナム戦争やカンボジアの内戦についてわずかながら学んだが、その中でも言論の自由が保障されていないために、ガイドさんや当事者が言葉を濁す場面が多々あった。これでは過去の事実を後世に伝えることはできないし、現地の子供たちは戦争やその被害・影響について本当の意味で学ぶことができず、その無知が同じ過ちを繰り返す原因にもなり得る。また、医療分野においても衛生教育の不十分さや医師や看護師を育成するための指導者不足の問題があるし、教育の場における教員不足は深刻である。私は、現地の状況を知らない日本人がいくら学校の校舎を作り、物質的な支援を行っても、教師がいなかったために学校として機能しないという話を聞き、情けなく思った。まず必要なのは、それぞれの分野における教員・指導者の育成である。教員や指導者の育成を支援することで、その後の国内におけ

る継続的な教育活動が可能となり、あらゆる分野の発展につながるのではないかと考えた。

今回、様々な研修先で話を聞き、現地の人々が本当に必要としている支援を知らずに「支援をしてあげている」という気になっている先進国の人々は大勢いるのだと知るとともに、実際に現地を訪れなければ分からないことがあり、現状を的確に把握した上で初めて支援を行うことができるのだと感じた。ツアーを終えて、自らの目で二つの国を見て、学び、考えてきた私たちには何ができるのか。このツアーで得た多くのものを糧に、一人ひとりが考えていく責任があると感じた。



【ベトナムとカンボジアで学んだこと】

京都外国語大学 外国語学部 2 年生

まず、ベトナム研修で学んだことは、主にベトナム戦争だ。私は、ベトナム戦争について、名前だけ聞いたことがあったが、どんな戦争なのか全く知らなかった。大きな国のアメリカが負け、小さな国のベトナムが勝ったと聞いたとき、あんな複雑な仕掛けをしていたからだと納得した。そして、今も枯葉剤の影響でこれから生まれてくる子供まで、悪影響を及ぼすことを実際に感じ、とても心が痛い。このことをもっと、日本にも知ってほしいと強く感じた。そして、初めて歩いて国境を越えて、プノンペンに着いた。もともとカンボジアには、貧困、汚いというイメージしかなかった。目の前に見た景色で私が感じたことは、「やばい」の一言だった。ごみが散乱し町がとてもきたなかったからだ。やっぱりこの国は汚いなとその時は思った。

しかし、プノンペンに着いてみると、想像していたものと全く異なっていた。とても栄えている印象だった。想像だけで国のイメージを決め付けるのはやはり良くないと改めて感じた。そして、私が一番楽しみにしていた TAYAMA 日本語学校では、これも想像していたものと全く異なっていた。また、私自身日本にある日本語学校では、何度も行ったことがあったが、外国の日本語学校は初めて行った。その日本語学校では、授業料は無料で、その代わり厳しい規律を守らなければ卒業できない。日本語学校の学生たちの「こんにちは」や、「ありがとうございます。」がすごく大きく、揃っていて、彼らの教育や日本語を学ぼうとする姿勢に、とても感動した。私は、もともと日本語を外国人に教えることを大学でまなんでおり、いざ外国の日本語学校で、プレゼンテーションで、出来るだけ簡単な日本語で話すことを意識することはとても難しく感じた。また学生と話すときはコミュニケーションがとても難しかったが、ほとんどの学生が日本語を学んでいる理由に、日本で働きたいや、日本人と一緒に働きたいなど言っており、大きな夢があつて、とても羨ましかった。

つぎに、印象に残った研修先はゴミ山である。まさかあそこで仕事しているなんて、想像もしてなかった。しかもそこで働いている人たちは、仕事がないだけではなく、自分が選んでこの仕事をしている人もいる。それは、いいのか悪いのか、日本人からすると。ほとんどのひとが悪いと答えるのではないか。日本以外にも、世界中からの視点でも考えていきたい。



【貧しさとはなんなのか？】

獨協大学 法学部 2 年生

私が今回このスタディツアーを通して考えていたことは、「カンボジアは本当に貧しい国なのか？」ということである。多くの日本人にとって“カンボジアは貧しい国”という認識だと私は思っている。人々がカンボジアを貧しい国、支援が必要な国として捉えているからこそボランティアとしてこのようなツアーがあるのであり、また沢山の人が参加するのである。もちろん、アメリカやイギリスのような先進国にも支援が必要な状況はいくつもあるかもしれないが、優先順位としてはまだまだカンボジアの方が高いであろう。そこで私は、このような認識が果たして正解なのか、それとも間違っているのか？つまりは、カンボジアは発展した豊かな国なのかということはこのツアーを通して確かめたいと思いこれをテーマとして設定した。

結論から言ってしまうと、私にとってやはりカンボジアはまだまだ貧しい国であった。しかしその結論と同時に、果たしてカンボジアは本当に貧しいのかという疑問を持つようになった。なぜ疑問に思ったのか、それは、このツアーを通してカンボジアの学生や働く人たちの話を聞くことができた。そのなかで、私の基準で彼らを貧しいと判断しているだけであって、彼ら自身は貧しいと感じていないのではないかと思ったからである。私にとって“貧しい”というのは、お金がなく、毎日その日を生きるために働いて稼いでようやくご飯を食べることができる、生きていくことがやっとであるということである。もちろんツアーを通して、お金を得るために必死にものを売る子供や、家とは呼べないような建物に暮らす人々、お金がないため学校に行けず働きに出ている人たちを沢山見た。しかし、そんな彼らの話を聞き会話をするうちに気付いたことは、そのような状況を貧しいと感じさせない強さが彼らにあったということである。その強さとは、その状況を辛いと思わずに、自分のやりたいことや夢のために目を輝かせながら必死に頑張れる強さだったり、明日という未来が分からないとしても今という時間を精一杯楽しめる強さだったり。目に見える数字で貧しさを測るならカンボジアはまだまだ支援の必要な貧しい国かもしれない。しかしその強さを間近で見て、貧しいというのは人それぞれの基準で決まる部分もあって、一概にはカンボジアは貧しいといえないのではないかと、そう思ったのである。

このツアーを経てもう一つ気づいたことは、日本はとても豊かな国であるということである。その事実は誰の目からも明らかであろう。当たり前のように綺麗な水を手に入れることができ、新鮮な空気と美味しい食材があり、その日暮らしの生活ではなく将来を見据えて生活ができる。一見、何不自由なく豊かに感じる。しかし、豊かすぎる日本にいらからこそ欲しかったものが手に入らなかつたり、やりたいことができなかつたり、ほんの少しの不足や辛さを貧しいと感じてしまうときもある。たとえ国が発展していようが、豊かであろうがなかろうが、貧しさというのは人それぞれなのだと私には



このツアーを通して気づくことが出来た。このことを忘れずに、自分自身が豊かになるにはどうすべきなのかこれから考えていきたい。



【ツアーに参加した私たちの責任とは】

相山女学園大学 現代マネジメント学部 2年生

このツアーに参加したきっかけは、“海外に行ってみたかったから”、“貴重な経験ができるから”、“東南アジアに興味があったから”など、人それぞれ違う。しかし、このツアーを終えて感じたことは、きっとみんな同じなのではないか。そう思わずにはいられない。

私がこのツアーに参加したきっかけは、東南アジアに研修に行ける機会なんてめったにない、という思いからだ。特別何かがしたかったわけでも、何か目的があったわけでもなかった。しかし、実際にツアーに参加し現地を訪れてみると、私の中で思い描いていたものよりも、さらに深く、濃いツアーであると感じた。医療、教育、企業、様々な視点から国について、本当の支援について考え、ディスカッションでは答えの出ない問いに意見をぶつけ合った。そんな中で参加者は、何をすべきか、何ができるかを考える日々だった。一方で、現地を訪れたことで、イメージとのギャップに驚いた面もあった。ツアーに参加する以前のカンボジアのイメージは、開発が遅れている、貧困に苦しんでいるといった、マイナスなイメージ、いわゆるステレオタイプの考えだった。しかし実際は、食べ物も豊富で餓死する人はほとんどいない、街中には海外企業の進出により高層ビルが立ち並び、店の店員の手には必ずと言っていいほど携帯電話が握りしめられていた。現実を目の当たりにし、今までいかに先入観で世界を見ていたかを思い知った。これらを踏まえて、本当に必要な支援とは何なのか、私たちにできることは何なのかを考えていかなければならない。そしてなにより、このツアーで見たもの、感じたものをアウトプットしていかなければならない。それが、このツアーに参加した私たちの責任であると考え。

責任という重いように感じるが、実際はそれほど難しいものでもないように感じる。日本人は、世界の国の人知っていて当然の常識を知らないと聞いたことがある。この話が本当か確かめるすべはないが、実際、開発途上国の国に対してまだまだ知らないことが多いのは確かであり、間違った支援のやり方をしている企業も多いと知った。しかしこのツアーの参加者は、実際に現地を訪れ、観光で訪れていたならば知ることがなかったような現実を知ることができた。たくさんの方々から話を聞き、様々な視点から物事を考え、多面的に捉えることができた。その経験はとても貴重で、日本にとって必要な知識であるように感じる。その知識、経験を自分の中で生かすのも、第三者に伝えていくのも自由だが、何もしないという選択肢はないように思う。なぜなら、ツアーを終えて、少なくとも自分の中で変化があったはずだからだ。自分の中で考え方、価値観が変わった時点で、このツアーに参加したことに価値がある。このツアーを終えた私たちは、ツアーで何かを感じ、考え、違う価値観に触れ、当たり前が当たり前じゃなかったことを知った時点で、このツアーに参加した私たちの責任は果たせている。そして今後、私はこの経験を何



らかの目に見える形で示していきたいと思う。



【全ての分野の基盤となる「教育」】

早稲田大学 教育学部 2年生

12日間のツアーでは、6分野にわたって様々なことを学び感じたが、改めて私にとって発見となったことは、「教育」はすべての分野の基盤である、ということだ。毎日の研修と毎晩のディスカッションを通して、このことを再認識した。例えば、地雷撤去活動をしているアキラさんは、「地雷による被害者をこれ以上増やさないためには、教育の徹底をすることが必要である」と仰っていた。HOPE 医療センターや CCH など他の研修先でも、度々教育に関連する話を伺った。また毎晩のディスカッションでは、テーマは様々な分野に及んだが、メンバーと意見を出していく中で「教育」という単語が何度も出てくることに気が付いた。「教育」はどの分野においても非常に重要で、人の成長に、また国の成長に必要な不可欠な要素であると強く感じた。

しかし、カンボジアでは未だ十分な教育を平等に提供できる環境が整っていない現状があることも学んだ。その一因には、ポルポト政権によって、特に知識人が虐殺対象となった過去を持つことが挙げられるのかもしれない。この現状を打破するにはまず、教育に対してマイナスなイメージを持ちうる親世代に、教育の重要性を伝えることが大切であると考えた。また、バイヨン中学校の先生からは、中学校が建設されても、高等教育施設が町の中心部にしかないことや、教師が足りていない現状を伺った。需要に対して支援が十分であったり、開発が進んでいたりする分野がある中で、教育に関わる支援はまだまだ足りていないのではないかと思った。

「教育」といえば、TAYAMA 日本語学校を訪問して生徒と交流した際には、彼らの学ぶ意欲の強さに非常に驚いた。「日本語の教師になりたい」「日本人と働きたい」などという夢をかなえるべく、毎日必死に勉強し、たくさんの事を吸収しようとする姿勢が見て取れた。まさに、教育のあるべき姿であると思った。それと同時に、日本人の教育に対する姿勢に、以前より強い違和感を抱いた。現在の日本では、小学校・中学校と義務教育を受け、その後も多くの人が高校、そして大学へと進学する。たとえ「学問を究めたい」という強い意思がなくても、進学することが「当たり前」で、教育を受けられることが当然だと考えられている社会のように思える。恵まれた教育環境が整っていることに対して、感謝の気持ちを忘れてしまっている日本の学生の意識は、自分も含めて変わらなければならない、と反省の気持ちも抱いた。

今回のツアーで研修先を訪れる度に、数多くの疑問を抱き、それに対して自分なりに向き合ってきた。「平和な世界を築くためにはどうすべきか」「本当の支援とは何か」「豊かさとは何か」など、なかなか明確な答えが出るものではなかった。しかし今、それらの疑問について考える際に「教育」が軸とすべき要素の一つであり、発展途上国を成長させる要素の一つなのではないか考える。ツアー中に生まれた疑問に、答えがあるのかさえも分



からないが、これからも「教育」という要素をヒントに、様々な角度から探ってみたいと思う。また、日々教育が受けられることに対して、感謝の気持ちを忘れずに勉学に励みたいと思う。



【教科書とは違うベトナム、カンボジア】

大分大学 経済学部 1年生

私は今回、ベトナムとカンボジアへの二カ国研修に参加した。研修前は産業分野の研修が一番興味を持っていた。Sui-joh, KURATA ペッパー、異国の地で0から事業を始め日々奮闘する日本人の方の話を聞いたのは非常にいい機会であった。彼らの共通点は自らが最もしたいことを日常にしている、苦難も成功も全て楽しんでいたことである。特に sui-joh のアサノさんは日本人が仕事を与えているのではなく、カンボジア人から仕事を貰っているという感謝の気持ちを忘れないと仰っていて、会社を存続、成長させるためには目先の利益の追求だけではいけないことを思い知らされた。また、カンボジアの現状、未来についての話もうかがうことができ、カンボジアは日本で認識されているほど貧しい国ではなく、餓死者はほぼおらず、経済は成長を続け、フィンテックの活用、キャッシュレス化の推進が進んでいる前途有望な国であることを知った。

二人の日本人からは前述の話以外に、カンボジアの歴史についても伺うことができた。さらに、地雷博物館、キリングフィールド、トゥースレンに研修として行ったが実際に拷問に使われた部屋、道具、犠牲者の頭蓋骨等々をみて、想像を超える惨さに言葉が出なかった。子供も拷問されたり、まだ幼い子たちを集めて兵士として育てたりした事実があり、日本の中学、高校でベトナム戦争、ポルポト政権について文章で学んだものと現地に足を運んで得た情報との乖離がとて大きかったことに驚いた。日本人は自国の被害にあったこと、原爆投下による被害などには80年近くたった今でも、自分のことのように心を痛めるが海外の戦争などで被害を受けている人がいるとなるとどこか他人事のようになるのである。世界で起こっていること、過去の歴史が今も国民に影響を与えていることを日本人の多くが知らない。そんな現状に虚無感とともにその現状を変えなければならぬ使命感を覚えた。そして、この研修の中で最も衝撃を受けたのがゴミ山であった。シェムリアップにはごみを燃やす焼却施設がなく、一か所にごみを集めて捨てていた。そこにはごみを選別し売ることを職業としている人々がいた。彼らの中には必ずしもその場で働かなくてもよい人もいるのだから驚きは大変なものであった。私はカンボジアにゴミ山があるということを知らなかった。自分の知識の無さを痛感するとともになにかよい対策はないかと考えたが、ゴミ山の件に関しては政府や国内企業が絡んでいて外国人である私がどうにかできる問題ではないと率直に感じた。ただ、その問題に絡むゴミ山で暮らす人々への支援は自分にもできるのではないかと、そう考え小さなことからでも大きな結果につながるよう行動してみようと思わされた。

今回の研修を通して学んだことは数多くある。そのほとんどが日本にいたら学ぶことのできなかつたであろう内容だった。しかし、日本に帰ってから現地で感じた思いを行動に変えなければ何も成長にはつながらない。行動していく中でさらに出てくる疑問、困難を



楽しんで乗り切っていきたい。

【過去から考えるこれからの世界】

関西大学 政策創造学部 2 年生

私は今回のツアーで、ベトナムとカンボジア 2 カ国の現在の状況は過去のそれぞれの国の歴史によって作られているものだと強く感じた。

ベトナムでは、ベトナム戦争での枯れ葉剤の影響で寄生児として生まれてきた人々の就労先がなく社会での自立が困難であるという現状がある。それにより、結婚が出来なかったり、自分の子供を育てられなかったりと身体的な影響だけではなく、様々な社会問題に発展している。また、ベトナムでも高齢化が進行している。その高齢者を支える世代がベトナム戦争の影響を大きく受けていたり、枯れ葉剤により寄生児として生まれ、自分一人では生きてはいけませんが支える身内がいなかったり、枯れ葉剤の影響というものの波及している現在への影響が広範囲にも及んでおり、今もなお苦しんでいる人々がいるということに気づいた。

カンボジアでは、ポルポト政権時の大虐殺により、教育者が減り、国内の教育が低下し教育を受けたくても受けられないまま大人になってしまい、現在働く先がなくゴミ山で生活を送っている人々や給与の高い首都や首都周辺で働くことが出来ない人々がいる。また、ポルポトの大虐殺により医者も多く殺害された。そのため医者不足による医療発展の進行の遅れや、必要な時に必要な医療を受けることができない人々が存在するという現状が存在する。

以上 2 カ国において、私たちにできることはあるのかと、無力感を感じるのは、これらの国の歴史が現在に大きな影響を与えているから感じるのではないかと思う。覆すことが出来ない過去の影響があまりにも大きすぎるからではないかと感じた。では、私たちは無力なままだ眺めているだけでいいのだろうか。そうではなく、これらの国の現状と向き合い、これらの国を変えていこうと尽力している人たちに会うことが出来た。

彼らは、これらの国がどのように成立し、どのような過去を持ち、それによる影響や、今抱える現状などの知識を持っており、これらの国にあった変化を目指していると感じた。Sui-jho の浅野さんは、この国を変えていくためにはこの国を知らなければならないとおっしゃっていた。また、SunriseJAPAN の中山さんは、ポルポトの大虐殺によりカンボジアが抱える医療分野の課題を把握していた。国の現状に向き合って、活動している人たちは、どうしてその課題が生まれたのか、どうしたら変えていけるか、その国で過ごす人々の環境や文化、特徴など細部までその国のことを知っているなど感じた。

以上のことにより、私たちがこれらの世界に何かしらの変化へ尽力したり、支援を送ったりするには、ただ自分自身が必要だと思っただけとか、自分自身の勝手な思いやりとか、独りよがりな考えでは、世界は変えることが出来ないのだと感じた。この世界には、歴史がある。そして、存在する一つ一つの国にもそれぞれの歴史がある。過去が現在につながる

っているということ、そして、過去は決して変えることが出来ないということ。その過去は必ず私たちに現在に出来ることを教えてくれる。過去から生まれたそれぞれの文化や特徴、課題や影響を、しっかりと知ること、そうしなければ、私たちは世界を変えることも出来ないのだと感じた。これからの世界を考えることが出来る私たちは、過去としっかりと向き合い、過去から教えてもらい、過去のからその国のことを知ることが大切なのではないかと感じた。

【ツアーから学び得たもの】

相山女学園大学 現代マネジメント学部 2年生

私が今回のツアーに参加したきっかけは様々な人の考えを知る絶好のチャンスだと思ったからだ。ツアーを経てディスカッションを通し、新たな視点や考えに触れることができたし、自分の意見を考え直すきっかけになった。実際に現地へ赴き自分の目で確かめることで発展途上国への支援の在り方、かかわり方を考えるうえで既存の固定概念や常識が本当に正しいか考えることもできた。わたしにとって特に印象深かったのは、3つある。

1つはアキラー博物館でのアキラーさんの言葉だ。ポルポトに対してどう思っていますかと質問すると、彼は親切でやさしい人だったと答えたのだ。私たちが知っているポルポトのイメージとは大幅に異なった意外な回答だった。私は結局ポルポトについては一つの側面しか知らなかったのだと反省した。それと同時に、私が知っている歴史は何かしらの形で誰かにとって都合のいい事実歪められているようにも感じた。もちろん、彼が行った数々の非道は決して許されるものものではない。だが、なぜ彼がそのような思想に至り、実行してしまったのか知ると違った側面が見えてくるのではないかと思う。

2つ目はカンボジアの紙幣であるはずのリエルの価値が低いという点だ。流通しているのはほぼ米ドルで、マーケットで買い物するとき、リエルを見せてもそんなお金はいらなといわれたり、首を横に振られたりとリエルの価値が低いということを痛感した。そして、それはこの国の様々な問題につながっているように見えた。具体的な問題点は経済的に海外に依存しきっている点だ。観光業に頼りすぎており外国人観光客ありきの経済になっていた。原因は国内の競争力が成長していないからだと推察する。なぜ国内の競争力が成長しないのか考えていくと、海外からの介入が多い現状が関係してくるようになってきた。実際にカンボジアでカンボジア人が経営している会社はほとんどない。私は今回のツアーを経て、関わりすぎないことこそ本当の支援ではないかと考え始めた。だが、現状私はカンボジアと日本のことくらいしか知らないため答えにたどり着けなかった。私はもっと世界を知りたいと思った。何より悔しかったことは、現地のガイドさんやアキラーさん、その他、話を聞かせてくださった人々は質問しても、政治的なことになると答えることができないと少し戸惑ったような顔で言ったとき、それがなぜなのか考えることができなかったことだ。自分をもっと世界についての情報を知っていれば、今回聞くことのできなかった質問の答えもおぼろげだろうと見えていたはずだ。

3つ目は、現地の学生の語学を学ぶ姿勢、意欲だ。TAYAMA 日本語学校を訪れた際に、ここに入学して5か月のクラスの学生たちと交流を行った。五か月とは思えないほど上手な日本語にまず驚かされた。どれくらい勉強しているのか聞いてみると7~8時間と答えた人もいた。なぜ日本語を勉強しているのか質問してみると日本と関われる仕事がしたいからだほとんどどの学生が答えた。こんなにも熱い気持ちをもって勉強に励む彼らがまぶし

くみえた。ここでの経験は私に危機感を与えた。世界が言葉の壁を乗り越えすさまじいスピードで市場が広がっている。だが、日本人の外国語に対する認識は薄い。世界を相手にアクションを起こせる人間を増やさなければ日本はいずれ世界に置いて行かれると感じた。

これらの3点から私は歴史と英語の勉強を本気で取り組むことにした。歴史はディスカッションの最中に自分が歴史を背景に物事を考えていることが多いと気づかされ、人の話を聞くうえで、今の通説が間違っていることも往々にしてあると実感したからだ。たとえ間違っていなくてもどちらか一方からみた歴史的事実だけでそこに実在していた人々を語るのには私にとって許しがたいことだ。「現在は過去の軌跡によって作られている」を念頭に置いて考える私にとって歴史を勉強することは考えの精度を高めるのに有効だと感じた。英語は広い世界を理解するツールに過ぎない。だが、逆に英語がわからなければそれこそ井の中の蛙のような状態に陥るだろう。もちろん井の中に居続けることを悪いと言っているのではない。ただ、私はできるだけたくさんの方が知りたいというだけだ。

私にはまだ将来の夢がない。ツアーがはじまる前はこれに参加すれば何か見つかるかもしれないと思ったが、実際は逆だった。余計にわからなくなった。自分の知らないことが多すぎて状態で道を絞ることが恐ろしく感じたからだ。その代わりに学びたいものは見つかった。この学びたいという気持ちこそ私がこのツアーで得たものだと思う。



【教育の必要性】

名古屋経済大学 経営学部 3 年生

私は、今回スタディーツアーに参加して、ディスカッションによる情報共有、感じたことの共有の重要性に気が付くことができた。その中でも幼少期からの教育の重要性について考えさせられることが多かった。

ベトナム戦争や、カンボジアの内戦によって、教育できる者が減少してしまったことによる教育不足を感じられたのは、衛生面の整備不足と、地雷などの戦争物による被害が現在も起きてしまっている現状からである。

衛生面では、感染症の予防として、手洗い、うがい、マスクをするといった教育が徹底されておらず、以前よりも感染症に発症する人口が減少しているとはいえ、まだまだ多いことが現状としてある。カンボジアの病院へ訪問したときに聞いた話の中で、カンボジアでは病院食という概念がないという言葉に驚かされた。食事による栄養管理も医療の一つだと考えていたが、それが当たり前ではなく、医療面での教育がされていないことがわかった。これは内戦によって知識層が虐殺されてしまったことによる教育者の不足が原因の一因だと思う。

政府による衛生面の整備も遅れているように感じられた。水道の整備はもちろんだが、ごみの処理については特に遅れている。水道の水が安全ではないため、生活に密着した部分をまずは改善しなければならないと思うが、設計、設置、管理をできる者が少ないため、遅れているのだと思った。ごみの処理についても、焼却という方法をとらず、ごみ山に集めているだけというのは、健康面に大きな影響がある。ハウスダストによるアレルギーは近所の住民にも広まってきていることもわかった。また、回収するときにも、生ごみそのまま道に積まれている状態だったことが印象的だった。臭いもひどく、健康への影響が少なくともあるのではないだろうか。

戦争に使われた武器による被害は、教育を受けることのできない子供に多くみられることが分かった。発展し始めているとはいえ、カンボジアの識字率は、約 78%と、まだまだ低く、農村部では約 75%まで下がってしまう。これは、都市部の約 90%と比較すると、とても低い数字だとわかる。しかし、戦争に使用された地雷や不発弾は農村部に残されているため、識字率が低いことが被害につながっているのだ。本来、学校で近づいてはいけないものとして教えられるはずなのだが、学校へ行けない者は、地雷や不発弾がどういったものかわからず、遊び道具にしたり、危険であると書かれた標識を認識できずに近づいてしまい、被害が出てしまうのだ。そのため、絵や口頭で伝えることが大切であると思った。

これらのことから、教育の大切さ、必要性について考えられるツアーであったといえる。ただ一人で旅行として行っていたら気が付けなかったことも多くあり、このツアーでそれぞれが違う視点で見て、交流することができてよかったと思う。これっきりにならないよ



う、今後私にできることを自分事として考え、広めていきたいと思う。

【カンボジアの貧困とは】

徳島文理大学 総合政策学部 3 年生

私は今回ベトナム、カンボジアスタディーツアーに参加した理由は自分の視野を広げたかったからだ。

カンボジアはポルポト政権時代の影響を現在にも影響しており経済成長が急速に進んでいる。しかし経済発展している都市部と地方では格差が成長するとともに開いていってしまうのではないかと思う。SUI-JOH の浅野さんの話を聞いた際に「カンボジアは貧困ではない」と言っていたが都市部をみれば高級車も走っており貧困には見えないがゴミ山や孤児など訪問して生活に余裕のない人をたくさん見て私はカンボジア全体が貧困とは言えないが貧困な人はいると思った。しかし、浅野さんによるとカンボジアは餓死する人の割合が低いと聞き、その理由を考えたとき、カンボジアの気候が乾季と雨季しかなく穀物が一年を通して収穫できることやカンボジアはソフト面が高く人と人との距離感が近く助け合い精神があるからこそ餓死率が低いと感じた。貧困＝食べ物がないという考えでいたがそうではなく、貧困とはなにかわからなかった。教育がすべてではないが、カンボジアで不自由なく生活するには勉強し就職すること。日本では簡単なことでもカンボジアではお金がなく満足な教育を受けず家の手伝いなど貧しい環境で育った子供たちはその環境から中々抜け出せず貧困のまま大人になりその子供も同じようになるのかなと思った。政府としても民間企業から賄賂を貰いゴミ山にゴミを捨てていることを黙認していたりまた、そのゴミ山で生活している人が少しのかすり傷とかでも細菌が入り次の日には死んでいることが珍しくなかったり他で就職しても決められた時間で仕事がしんどくやめて好きな時間にゴミを集めて生活する方がいいという人がいたりとしっかり教育が受けれていれば衛生面や決められた時間で働くことが苦にはならないと思う。

各国がカンボジアに支援しているがお米はカンボジアにはたくさんあって輸出しているのに支援で送ったりカンボジア人は井戸水を言い伝えて飲まないのに井戸を支援で作ったり、支援先の現状把握など支援する側も責任をもって取り組まないといけない。他に支援を考えたとき仕事の技術提供して働ける環境作りが大切だと思った。その技術によりメリットはあるがデメリットで技術を教えてもらえなかった人たちとの格差は広がる一方なのではないかと思う。

私はこのスタディーツアーに参加してカンボジアのイメージが 180 度変わり、貧困について深く考えることができた。お金がないから貧困ではなくお金がなくても生きがいがあったりと生活の満足度はお金だけではないと感じたが、貧困の答えはこの 12 日間では見つからなかった。様々な立場で物事を考える大切さなど学ぶことがたくさんあったと同時に今自分に何かできるかと考えたときに今の自分には何もできず無力感を感じた。私が感じたカンボジアの行ってみた感想や魅力や現状を日本で伝えることが今できる支援だと考



え真実を伝えていきたい。

【ベトナムとカンボジアでの発見】

北九州市立大学 外国語学部 2年生

私は今回のベトナム・カンボジアを巡る2カ国のスタディーツアーで初めて海外に訪れた。そういった状況のため、今回のツアーはとても刺激的で、新たな視点や考え方を持ってきたきっかけとなった。この論文では、今回のツアーを通して発見した視点や考え方を述べていこうと思う。

まず、ベトナム戦争やカンボジア内戦に関することが挙げられる。日本人にとって戦争は70年以上前のことであるため、戦争を身近に感じにくい。しかし、ベトナム戦争やカンボジア内戦はほんの40年前の出来事なため、まだその時代の当事者が生きているため戦争の記憶や傷は生々しく、戦争の影響は今なお残っている。その影響は多岐にわたり、健康被害や経済的な打撃だけでなく、人々の精神にも深く傷を負わせている。トゥールスレン収容所博物館でのパルリーさんの返答やアキラ地雷博物館のアキラさんのお話を伺ったときに、そのことを感じた。

次に、日本人とカンボジア人の生き方や仕事に対する姿勢の違いについての発見を記していく。町や人々の様子を見てみると、自由でゆったりとした雰囲気を見て取れた。日本では、多くの人が時間に追われ、日々忙しい生活を送っているため、正反対であると思った。KURATA ペッパーの倉田さんやSui-Johの浅野さんも、日本と異なりカンボジアには四季がないため、カンボジアの人々は耐えることや資産を蓄えることをせず、その日暮らしをしがちであると話していた。日本とカンボジアの人々の生き方の違いを見たときに、どちらも良い面、悪い面があるため甲乙つけがたいと思った。しかし、カンボジアは現在著しく発展しており、先進国の外資なども続々入っている。そうした中で、仕事に対する先進国の日本的な考え方とカンボジアの人々の考え方は大きく異なるため、その折り合いや共生をどう図っていくかが今後の課題となっていくだろう。

最後に、福祉や教育について書いていく。今回訪れた教育機関や福祉・医療施設は無料の所が多かった。それは、カンボジアの人々に広く教育や福祉、医療を提供したいという思いがあつたことだろうと感じた。それを受けているカンボジアの人々も、熱意を持って一生懸命それに応えている印象を受けた。例えば、TAYAMA 日本語学校が挙げられる。この日本語学校も無料で日本語や日本の習慣、マナーなどの教育を生徒に提供している。この学校でプレゼンを行い、その後生徒と交流した際、明るく丁寧な姿勢や学習意欲の高さに圧倒された。この様な施設が都市部のみならず、農村部でも増え、格差がなくなっていくことを願っている。

今回のツアーはとても濃密で、様々なことを考えさせられた。発見したことやもっと調べたいことが多くあるため、この論文では書ききれない。それほどまでに、渡航前と比べ、自分の中でベトナムやカンボジアのイメージは大きく変わり、魅了された。ベトナム



ム・カンボジアについてより知りたいため、また訪れたいと感じた。

【12日間で見た世界】

同志社大学 法学部 2年生

私は、今回の12日間のツアーを通して学んだことが大きく分けて三つある。

一つ目は、固定観念の恐ろしさ、そして自分の目で実際に確かめることの大切さである。このツアーに参加するまでの私の中のカンボジアに対するイメージは、「貧しい」、「地雷」、「支援が必要な国」というものだった。また、自分が貧困地に対して何も出来ないという無力さを感じて帰るのではないかと、という危惧さえもあった。しかし実際に訪れてみると、一気に自分の固定観念を覆された。カンボジアが貧困な国だとは全く感じなかったのだ。確かに、学校も行けず、生きるために物乞いをする子供たちの姿、粗末な住居、ゴミ山で生活をする人々の姿を目の当たりにした。しかし、それ以上に現地の人々の温かさや、まぶしい笑顔、そして日本人学校の生徒たちの、知的好奇心の方が私には印象的だった。物質的には貧しいかもしれないが、カンボジア人の精神的豊かさを感じた。私が抱いていた、カンボジアに対する固定観念を覆され、とても申し訳ない気持ちになった。そして同時に、固定観念の恐ろしさを実感させられた。先進国の人から「貧しい」「教育が無い」「怠け者である」「社会が腐敗している」「衛生観念が発達していない」などと決め付けられ蔑まされている人達の気持ちはどんなものなのか？自己の目で確かめもせず、固定観念で物事を語ることは他者を傷つけることになるのだ。

二つ目は、命の重みである。ベトナム戦争証博物館で見たホルマリン漬け・生々しい写真、トゥールスレン収容所で見た生々しい血痕。どれも胸が締め付けられるものだった。なぜ、自分と同じ人間がこのような恐ろしいことをできたのか？何が彼らをそうさせたのか？不思議だった。「どのような人間であれ等しく、同価値の命を有する。」この言葉、綺麗事にしか聞こえないかもしれない。しかし、綺麗事という言葉で終わらしてはいけない。

三つ目は、幸せの基準を測るものさしは人それぞれであり、それはそれで良いのだということ。このことは、シエムリアップにあるゴミ山へ訪れた際に、そこで暮らす人達の笑顔を垣間見た時に感じたことだ。現代の日本人は、自分の幸せを他者との比較で測っているように感じる。自分は自分で良いのだ。自分の人生の主役は自分なのだから。

この12日間は自分の人生の中で最も濃密な日々だった。しかし、たった12日間で私が見た世界はほんの少しにしかすぎない。カンボジアへは再度絶対に訪れたいと思う。というのも、カンボジアの人々の純粹無垢な笑顔とは裏腹に、心の底に何か悲しみを帯びた暗い影を見た気がするのだ。私には、それが気掛かりで仕方がない。この数日間では、全く紐解けなかった。その闇が、カンボジアの本質を物語っている気がする。そのためにまずは、カンボジアの歴史、そしてコミュニケーションの手段となる言語を学ぶことから始めたい。



【本当の支援とは】

岩手大学 人文社会科学部 2年生

私はこのツアーに参加して、ベトナム・カンボジアの印象が180度変わった。これまで「どこか貧しい国で支援をしてあげべき」という印象を持っていたが、実際に訪れてみて、必ずしもそうではないと分かった。都市部では、高層ビルが建ち並び、屋内ではWi-Fiが完備されており、多くの人がスマートフォンを持っていた。ハード面の整備がまだまだだと思っていたが、日本の都市部に似たような街並みで驚いた。都市部だけ表面的にみると支援は必要ないようにも思えた。しかし実際に過ごしたり、話を聞く中でまだまだ至らない点は多くあると感じた。

まず一つに「公衆衛生」の整備が必要だと考える。具体的に言うと「命に関わるハード面の整備」から優先して行うべきだ。水道の水を飲むことで体調を崩してしまうのは、あまりにも危険な状態である。トイレの清潔さも求められる。上水道・下水道の整備にはお金をかけるべきだ。また、ゴミ山を実際に訪れた時の衝撃は大きかった。今すぐ無くすべきとまでは言わないが、健康被害や環境汚染を考えるとこのままゴミを積み重ねていくのはよくないと考える。経済発展のための社会インフラよりも、公衆衛生を優先した政府の投資、そして他国からの支援が必要である。

二つ目に、孤児院等に対する支援について考察する。孤児院等の施設に行くと、思わず洋服や玩具を大量に寄付したくなってしまう。しかし訪問してみると、子供たちは比較的立派な服を着ていて、おもちゃも扱いなれていた。洋服はもう足りているとも言っていた。これではニーズに合わない支援をしてしまう可能性があると感じた。それを避けるためにも、まず現状を知り、何の支援が必要なのか知識をつけ、ニーズに合った支援を行うことが重要であると感じた。

日本はカンボジアに対して多くの支援をしていることが今回このツアーに参加して分かった。自国の支援が他国のためになっているのはとても誇らしいことであるが、同時に多少の違和感もあった。観光地のトイレに「日本が建てました」の看板が多く存在したり、農村の学校では、至る所に日本が支援してくれましたという表示があった。個人的にはどこか「日本は他国に支援してあげています」といったようなアピールにも感じられて、日本政府の思惑も少しあるのではないかと考えた。また農村の学校の「日本がもっと支援してくれるならば、高校も建てたい」という言葉が印象的だった。いずれは自国の力で自立し、支援がいらないようにといったような言葉が欲しかった、とも思った。

日本も自国の災害の復興が十分でないのに他国の支援をする余裕はあるのか。ニーズに合わない支援を自己満足でしてしまっていないか。また支援される側の態度はどうあるべきなのか。本当の支援を突き詰めると、私自身まだ明確な答えを出すことは出来なかった。今後は本当の支援についてより一人一人が真剣に考えていく必要があると思った。

【生きるとは】

早稲田大学 教育学部 1年生

何度生まれ変わっても、あの瞬間1つ1つをまた味わいたい。私はツアー後にそう考えた。それは、自分の成長を感じたからである。他人から言われて気がつくならまだしも、自分の成長を自分で感じたことが今までにあっただろうか。それだけの心が動く12日間であった。自分の意見を言うことで、それが、相手からも貴重な意見が聞けるきっかけとなる。そして、その話し合いの先に生まれる新しい発見があった。物事には、それに関係した人数分の捉え方や考え方があるということ、しっかりと気づくことができた。同じ場所へ行っても、見ているところ、感じることは、それぞれ違う。そしてまた、日本人とその他の国の人では、理解し合えないと思うほど、根本的に考え方が違っていた。

例えば、カンボジアでは、給料日にその給料をほとんど使い尽くしてしまうことが多いという。それに加えて、仕事をすぐに辞めて、新しい職へと移ってしまうそう。これを最初に聞いた時、私は、その行動の目的がわからず疑問が浮かんできた。なぜ貯金をしないのだろうか。なぜ仕事を続けないのだろうか。そう考えた。しかし、貯金をすることや仕事を続けることがなぜ当たり前なのか。その理由を考えた時に、自分が理由もなくこれらを行なっていることに気がついたのだ。日本の風習に従い、これらを行うことが理由もなく当たり前になっていた。そして、これらを行わないことは、よくないことだという自分の価値観を押し付けていた。

しかし、考えてみると、私の価値観は、必ずしも正しいものではないと感じた。給料日にそのお給料を使う。時給の良い仕事へすぐ移る。もし明日死ぬとしたら、そんなカンボジアの方が、幸せなのではないか。私たちより余程『今日』を噛み締めている。そう感じた。私たち日本人は、石の上にも三年という諺があるように、耐えることが美德である。しかし、努力が成就する未来のために、耐えて耐えて。それが生きているといえるのだろうか。今日を未来のために費やす毎日を送り、私たちは、いつ、『今日』を生きることができるのだろうか。そう考えると、先のことを考えるべきというのは私の価値観でしかなく、しかもそれは、打ち砕かれたのだ。

まだまだ『今日』を楽しむやり方がある。そう気がついたのは、明らかにカンボジアで出会った人々から得た宝物である。また、『選択肢』をもつ大切さにも気がついた。きっかけは、アキ・ラー地雷博物館でアキ・ラーさん本人からお話を伺ったことである。幼少期にポル・ポトから洗脳を受け、拷問や、地雷の埋設を平気で行い、ベトナム軍に捕まった後は、ベトナム軍としてポルポト政権に立ち向かう。その後、洗脳から解放され、自分のしてきたことを悔やみ、地雷撤去作業を行い、今へと至る。

アキ・ラーさんのお話に触れ、当時は、ポル・ポトの残虐さに心が痛み冷静にはなれなかった。しかし、後になって振り返ると、『選択肢』を持つ大切さを感じたのであった。

人生に『選択肢』は絶対に必要だと、今の私なら言い切ることができる。生きるために、ある日からベトナム軍となる。自分のすることは、人を殺すことである。このように他に選択肢のない状況の中で、アキ・ラーさんは、脱走という新しい選択肢を自分で創り出し、脱走して今の地雷撤去作業へと至った。そこからアキ・ラーさんの人生に移り変わったと、私は感じた。

自分の人生を生きることと、選択肢をもつことは密接に関わり合っている。そう考える。それは、日本においても同じである。日本には、仕事をするのが当たり前という考えがある。その考えのもと、就活をし、就職する。このような経緯で働く人が日本には多い。しかし、『働かない』という選択肢も持った上で就職したとしたら、それこそが、自分で自分の人生を歩んでいるといえるのではないだろうか。

人間が自分の人生を生きるためには、与えられた『選択肢』から選ぶのではなく、自分で『選択肢』を増やす努力が必要であることを、私は学んだ。

また、CHAでも学んだことがあった。CHAに行き、本当の支援とは何かを初めて実感した。病気や、体が不自由になり、自分は家族の重荷であると感じる生徒に、縫製の技術などを教える。その技術で、生徒は自分でお金を稼げるようになり、社会復帰できるようになる。ここでは、自分に自信をつけることができるのだ。CHAでは、CHAにいる人全員がお互いを思い遣っていた。支援者からの思い遣りだけでなく、それに対する感謝を含めた被支援者からの愛情をも感じた。本当の支援には、家族のような温かさがあることを知った瞬間だった。

私は普段、支援とは何だろう。私の募金が実際のところどのように使われるかが分からない。微力、もしくは無力であるのかもしれないと感じることがある。しかしCHAは、このような支援からは、かけ離れたものだった。相手と暮らし、相手を知り、相手を想うからこそ、心からの愛情をもって支援する。こうした支援こそが、相手の将来も考えることのできる本当の支援になるのではないか。そう考えた。

ただ募金や支援をするのではなく、相手を愛する気持ちをもつこと。それが相手を知り、継続的な本当の支援へと繋がることを知った。

私はこのツアーで、多くを学んだのだった。この経験は、この先の人生に多くの影響力をもって私の中に残り続けるだろう。

【ツアーを通じて感じた大切なこと】

早稲田大学 社会科学部 3年生

私は、今回ベトナム・カンボジアのインターンシップ型スタディツアーに参加し、あらゆる文化や人々に実際に触れて、ベトナムやカンボジアのイメージが180度変わり、自分の考えや行動についても変えることが出来るきっかけとなった。

まず、ツアーに参加する前までのベトナムやカンボジアのイメージは「貧困」「支援が必要」であった。しかし、実際に現地へ行ってみるとイメージとは全く異なった社会が形成されていた。街は活気に溢れており、人々は楽しそうに生活し、どこが貧しいのだろうかかと疑問に思うほど貧困とはかけ離れていた。確かに農村部ではインフラが整っていない地域が存在していたが、多くの人々がそれらのイメージだけを持ってカンボジアなどのイメージを作ってきたのだと感じた。「支援」に関しても必ずしも良いものであるかどうかについて考えさせられた。私たちが勝手に貧しいというイメージから一方的に行われる支援は、その人たちにとって何も意味しない無益なものであるかもしれないということに気づかされた。逆に現地の人々の生活に悪い影響を与え、豊かさを失う結果となることもあるかもしれないと考えた。また、心の豊かさを考えたときには、日本よりもカンボジアやベトナムの方が豊かなのではないかと考えた。経済面では日本の方が上回っているが、人々の意欲や生き生きとした姿や人のために動く姿を見ると日本のように周りには干渉しない人々が多い社会から比べると豊かであるのではないかと思った。それらのことから考えると、日本人の価値観から勝手に貧困を決めつけて「支援」を行うのは間違っており、相手のニーズに合わせ、今後の成長に寄り添いあいながら、協力して行くことが本当の「支援」なのではないかと考えた。

自分の考え方や行動については、12日間を通して全国から集まった人達とのディスカッションなどを毎日行い、今までの自分では考えもしなかったような発想などを聞き、自分の視野の狭さや勉強不足を実感した。また、Suijohの浅野さんのお話で失敗は行動しないことであると教わった。いままでの自分は、失敗のリスクを考えてやってみないことであっても挑戦しないことが多く存在した。人生は1回しかないのに挑戦しなくては意味ないし、それを楽しまなくてはもっと意味がないと感じた。リスクを考えて後で後悔するよりも、全力でやりたいことに挑戦して、失敗しても人生の経験になるということを知り、これからはそのようにしていかななくてはならないと考えた。また、選択の幅の広がりも感じることができた。

12日間を通じて、実際に知った、見た、聞いたこと、そしてその時々感じたことをこれからの人生に生かし、自分が本当にやりたいこと、将来どう活躍するかを考え、選択の幅を広げて多くの人々に本当に必要とされることを行えるような人間になるにはどうすればいいかを今後考えていきたいと感じたツアーであった。

【豊かさのみつげかた】

愛媛大学 農学部 1年生

私は、このツアーを通してこれからの豊かな暮らしについて考えた。これまでは、いい大学に行き、一流企業に勤め、いい給料を貰うことがいい暮らしだと考えていたこともあった。しかし、それだけではないという考えに至った。

第一に、自分のやりたいことをやることが重要であると考えた。これは、Sui-joh の浅野さんや KURATA ペッパーの倉田さんの講演から導き出されたものである。二人とも起業家ではあったが、本来の目的は起業ではなく、別のものであった。つまり、起業は自分のやりたいことを実現するための一つ的手段に過ぎないと考えた。また、浅野さんの「アリとキリギリス」の話から、環境を変えること、自分に合った環境を自分で作っていくことが、やりたいことをする上で重要であると学んだ。

第二に、最低限の安定的な暮らしをするためにもお金は必要であると考えた。カンボジアでのゴミ山視察やツアー中に子どもの物乞いを多く目にしたことから、そのような生活では金銭的にも精神的にも豊かな生活は不可能であると考えた。まずは、最低限生きていけるだけの資金が必要であり、それがなければやりたいことを考える余裕もないだろう。特に、資本主義の日本ではお金の重要性は高く、多くの不安や問題がお金で解決することも事実である。最低限の収入が安定的に手に入る心が心の豊かさにも繋がっていくと考えた。

第三に、最終的に豊かか豊かでないかを決めるのは自分であるということである。「足るを知る者は富む」という言葉がディスカッションの中でも出た。お金、食べ物、服、家など豊かな暮らしの象徴的なものがすでにあっただとしても、その人自身が十分だと感じなければ、それは豊かではない。一方で、そのようなものが十分になかったとしても、それでいいと思うことができれば、それは豊かである。日本人はその豊かであると思える水準が高すぎるのではないかと考える。この水準を自ら下げることができれば、豊かさは簡単に手に入るのではないだろうか。

このツアーを通して出会ったカンボジアの人々はみんな心が豊かであった。Sui-joh の浅野さんが「カンボジアの人々は、お給料を貰うとその日にすべて使ってしまう」という話をしていた。このことから、カンボジアの人々にとって、その日を生きられれば十分であり、「その日を生きることができる」ということが豊かであるのだと知った。ここに日本人との大きなギャップを感じた。今や日本では、老後のことを考えて若いうちから貯蓄をすることが当たり前となっている。それは、老後を豊かに過ごすためである。この考え方で本当に豊かになれるのだろうか。老後という不確かなもののために、今を捧げて生きるということが正しいのだろうか。このツアーから学んだことは、そんな先を見て生きるのではなく、今あるものを見つめ、今を今のために自分のやりたいことをすることそのものが豊かであるということだ。



【二カ国研修を終えて】

中京大学 経営学部 1 年生

今回研修に参加してみてまだまだ自分の知らない世界があるということ、教科書に載っていることだけでその国のことを分かったような気になっていること、その国に行ってみないと分からなかったことを学べた。

その他に心に残っていることが三つある。

一つ目は学生が熱心に勉強をしていたことだ。研修に参加する前から日本の学生の勉強に対する姿勢に疑問を持っていた。日本の学生もちろん熱心に勉強をしている人はいるが、多くの学生はただやらされて勉強をしている感じがする。でも、カンボジアの学生は知らないことをすぐにノートに書いて覚えようとしたり、たくさん質問をしてきたりして学びたいという気持ちを強く感じた。そういう姿勢を見て、これだけ教育環境が整っていて、何でも学べる日本でなぜ今まで勉強をすることができなかつたのかと思い、少しでも勉強に対する姿勢を変えていこうと思えた。

二つ目は、日本で当たり前なのが外国では当たり前ではないということだ。日本では中学校まで当たり前で学校に通うことができているが、カンボジアの農村では中学校に通うことは当たり前ではなく、家の都合やお金の問題で教育を受けることができない子がいると聞いた。また、日本では表現の自由があり自由に発言できているが、カンボジアではポルポト政権時代の話は話すことができないと聞いた。ベトナムでも、ベトナム戦争で多くの命が失われ、自分より小さな子が亡くなっているのを見た。こうして多くのことを見たり聞いたりしたことで日本では当たり前なのが外国では全く当たり前ではなく、自分が教育を大学まで受けることができていること、自由に自分の言いたいことを言えること、この年まで生きてることがどれだけ恵まれた環境にいるのかが分かった。

三つ目は、カンボジア、ベトナムの人々の温かさと親しみやすさだ。CHA の代表の方みたいに人のために毎日働いていたり、怪我をしている人がいれば荷物を持ってあげたりと現地の方はみな優しく、困っていればすぐに助けてくれた。そして話しかけてくれたり、よく笑っていたりと、どこにでもそういう人がいた。だからマーケットでも楽しく買い物をすることができたし、ガイドの人とも楽しいツアーを送ることができた。この研修に参加したことで東南アジアについて詳しく知りたいと思えたし、これからもっと世界を見てまわりたいと思えた。



【普通とは】

早稲田大学 商学部 2年生

私は今回のツアーに何か崇高な志を抱いて参加したわけではない。ただ、旅行ではなく、スタディーツアーに参加することで日頃抱えている何かを変えるきっかけになればという理由や、将来海外で働きたいなど思っているのも、現地の雰囲気を感じてみたかったという理由だけしか持ち合わせていなかった。漠然としたものだが、私は将来自分がどう生きていくかということに対する不安があるのだと思う。自分はかなり狭い世界で生きてきた人間で周りにも似た環境で育ってきた人ばかりである。ベトナムとカンボジア、何も知らないこの国で日本各地から集まった人と過ごす。自分の固まった価値観・狭い視野が壊されて、開けるのを期待していた。結論から言えば、期待通りだった。見るもの・聞くもの・感じるものすべてが衝撃的だった。同じ人間なのにここまで違うのかと思った。特に自分の中の価値観を変えたのは二国の人々の考え方・生き方だと思う。

私のベトナム・カンボジアへの印象は発展途上国故に、あまり栄えていないものだと思っていた。しかし、Sui-Johの浅野さんのお話ではカンボジアは豊かな国だと仰っていた。確かに都市部や観光地は綺麗に整備されて栄えていて、予想以上の発展具合だった。ただ、都市部から一歩出ると、物乞いをする子供達や農村の粗末な住居を見かけた。シェムリアップのゴミ山に至ってはあんなものが存在するなんて信じられなかった。そのとき自分の当たり前という偏見が壊れた気がした。日本に比べて何もかも劣っている気さえした。けれどもそれも間違っていて、彼らの「心の豊かさ」はもしかしたら我々日本人より豊かなのかと痛感させられることが多くあった。ゴミ山で笑って生活している人々、日本語学校で私たちの話を輝く目で見つめる生徒たち、彼らを見ていると何が豊かさなのかを深く考えさせられる。先ほど述べた浅野さんのお話にも納得できた。この経験・ディスカッションを通して豊かさとは結局のところ第三者が介在する余地はなく、自分の心の持ちようなのだと考える事ができた。日本にいては、特に自分が過ごしてきた環境では豊かさとは物質的に・金銭的に充足している状況だと思ってしまいうし、そういう豊かさを求めていることは自分でも実感できる。将来の自分はそういった豊かな状態であってほしいと思うことはやはりまだ変わらないと思う。ただ、何かそういう俗物的な思いだけを持ち合わせていると時々空虚になる事がある。今回の研修で知らない人たちと過ごしたこと・現地のナイトマーケットやお店で店員と触れ合ったことなど、これらが非常に楽しい思い出だった。日本にいてはなかなか経験できないことだと思った。その経験をしているとき自分の心は満たされていると感じた。こういう人とのふれあい・繋がりが日本では足りていないのかもしれない。幸い自分は家族・友達など周りの人々に恵まれている。だからこそ無意識に物質的・金銭的な充足を求めていたのかもしれない。豊かさ一つとってもこんなにも頭を悩ませる事ができて、多角的な見方ができる。このことに気づいただけでも今回の



ツアーに参加してよかったと心から思える。今後このツアーの経験を生かして自分なりの豊かさを見つけていきたいと思う。



【イメージとのギャップ】

徳島文理大学 総合政策学部 3年生

私は、今回のベトナム・カンボジアスタディーツアーに参加して、「イメージ」という言葉が自分の中で印象的でキーワードだった。その理由として3つ挙げられる。

まずは、ベトナムとカンボジアの国の「イメージ」である。私はこの2か国は貧しい国だと思っていた。内戦がひどく、街は荒れていて、人も私たちみたいな観光客に対して、敵視していると思えば不安だった。しかし実際は、多少は貧しいところはあるが、都市部を見たときに豊かで裕福そうな方々がたくさんいた。街もゴミなどはあったが、内戦などで荒れている様子はなかった。そして人もみんな優しく私たちにたくさん話しかけてくれた。私が今まで思っていたイメージとはかけ離れていた。

次に、経済や政治の「イメージ」である。想像では、日本でいう「ホームレス」みたいな方がたくさんいて、働き口が無かったり、所得が低い方がたくさんいるという想像でした。また、カンボジアは1.0の国でポルポト政権、貧困問題や地雷問題が多い国というイメージをしていた。実際はそんなにひどくはなく、今やカンボジアは経済成長が著しく、3.0の国で国際競争ができる時代である。もちろん1.0時代のように、過去の後遺症のような問題、事故があるのは事実である。しかし、私たちがカンボジアを1.0だと思い込み、カンボジアを訪ねる。その思い込み故に、色眼鏡を通してカンボジアを見て、帰国する。カンボジアが3.0まで進んでいることに気づかない日本は、危機感を持つべきである。

最後に、カンボジアの人たちの働き方の「イメージ」である。貧しいというイメージからカンボジアの人たちは生きるのに必死で朝から晩まで働いていると思っていた。また、子どもたちも学校には行けず、働いているものだと思っていた。しかし、一般的に午前8時始業の8時間勤務で日本と変わらない。また聞いた話では、連休に実家に帰って、その後帰ってこないことがあるらしい。また、時給がいい仕事に点々とすることも多いらしい。子どもたちも全員ではないがちゃんと教育を受けていたり、働きながら通う子もいると知った。

これらの3つから、なぜこんなにもイメージとのギャップが生まれるのか考えてみた。私は行ったことのない国を調べるときに、テレビやインターネットの情報をうのみにする傾向がある。それは私だけではないと思う。特にインターネットは間違った情報も多く出回っている。その情報がすべてだと思い、実際に訪れたときに「ギャップ」が生じると思った。これからは何が本当の情報で、何が間違った情報か私達は見極める判断力が必要になる。

【循環する支援】

南山大学 人文学部 2年生

支援とは、共有である。私は本研修の経験から、支援は一方的な行為ではなく、相互的な働きかけであると考えている。

支援は、何を目的して行われるのだろうか。一般に、支援は労力や金銭などの面で他者を支えることである。すなわち、支援は被支援者が抱える問題に対して働きかけることを目的とする。このため、支援のあり方は、問題の捉え方により異なると考えられる。

被支援者が抱える問題に対する捉え方は、以下の二つに分けられる。第一に、問題は解消されるべきものとする捉え方が考えられる。この場合、問題の完全排除という明確な到達点があるため、比較的短期的な支援により、被支援者の状況は大きく変化する。第二に、この問題解消志向の支援に対し、問題共生志向の支援が考えられる。この場合、問題は解消されるものではなく、被支援者と共にある中で改善されるべきものとして捉えられる。このため、支援は明確な到達点を持たず、比較的長期的なものとなり、被支援者の状況は緩やかに変化する。

支援者は問題をどのように捉えるべきだろうか。私は、問題共生志向的な捉え方をすべきであると主張する。なぜなら、この捉え方において、支援者は被支援者と同様に改善すべき問題を抱えているという前提があるためである。

問題との共生を念頭に置くことで、問題に対する支援の見直しが行われる。ある問題に対する支援は画一的である。これに対して、問題を抱える被支援者のニーズは現場や時代ごとに多様である。このため、問題に対する支援は定期的に見直されることで、その柔軟性が保たれる必要がある。しかし、問題解消志向的な捉え方では、一時的な支援が完了することで問題は解消すると考えるため、問題に対する継続的な見直しが期待できない。加えて、問題解消志向的な捉え方が支援者だけでなく被支援者にも浸透することで、支援を必要としている現場があるにも関わらず、同じ地域の人々がそれに気づくことができない状況が生まれることも想定される。よって、支援者は問題を解消すべきものではなく、共生するべきものとして捉えるべきであると考えられる。

問題共生志向的な捉え方に基づいた場合、我々が他者に行う支援とはどのようなものであろうか。私は、支援者と被支援者が自らの持ちうる知識や技術、考える術を共有することが、問題共生志向的な支援であると考えている。私は、本研修において、日本がベトナムやカンボジアよりも恵まれている側面があると感じると同時に、その逆の側面も感じざるを得なかった。ベトナムやカンボジアには、日本が発展を遂げる中で手放したものがある。例として、人と人の繋がりが挙げられるだろう。日本では、この感覚の希薄化により、様々な社会問題が生じている。日本は自身の問題と共生していくための術を、これらの国々から学ぶことができるのではないかと。国家間で共有した財産を、さらに国内や地域



で共有する。支援とは、世界の人々が持つ術を共有し、見直し、成長させていく働きかけの循環を指すのではないだろうか。

【ツアーを通しての自分の生き方、人生とは】

高知大学 人文社会科学部 1年生

このツアーが自分にとっては初めての海外ということもあって、何もかもが新鮮で刺激的な研修になった。どの研修先でも、多くのことを知り、学び、また考えることが出来た。2カ国ツアーに参加することでベトナムからカンボジアへ国境を超えた。日本ではできない陸路で超えるということに感動した。国境ひとつ越えるだけ、こんなにも空気感やイメージがガラッと変わるのは凄く新鮮だった。両国でも自分たちが目にしたものがその世界の現状であり、たった一部のことにしか過ぎない。無力な私たちは何もできないことを思い知らされ、胸が熱くなることも多くあった。私たちは世界どころか一国、ましてやその地域すら変えることが出来ない。ただ、できるのは現状を見て、受け止め、伝えること。

私にはまだまだ勉強が必要である。知識面でも、語学面でも。ツアーに参加するにあたってもっと勉強しておけば、見え方が違ったのではないか、と思うことも沢山あった。また、知識として更に深く知りたいと思うこともある。そして、世界では第二言語が話せないと仕事をもてない人たちが沢山いる。それに対して、自分はどうか。相手に頼りすぎている。私は甘く考えていた。だからそこ、これからは自らがもっと勉強し、コミュニケーションを取れるように、自分の言いたいことが伝わるようにしていきたい。ツアー中も沢山のことを学んだが、自分が何に興味関心を持つかということがわかったので、そのことについて、これからもっと深く学び知識を増やしていきたい。

12日間のツアーに参加したことで、自分の中で大きく考え方が変わったと言うより変えようとおもった。今まで、全てのことに於いて最後までやり遂げることが正解だと思っていた。しかし、それが全てではなことに気付かされた。物事において正解はなく、自分自身が着地点を決めるだけ。私は、諦めない、妥協しない、逃げないと言ったように自身に言い聞かせることが多い。物事に対してこういった考えを持っていたが、ツアーを通して逃げることも大切だと思った。逃げると言ったら聞こえは悪いが、考え方を变える、立ち止まってまた1から初めてみるという事は悪いことではない。むしろ今の自分にとっては必要な事だと思う。逃げるのは簡単な事のように思うが、とても勇気のいることだと知った。

また、大切なのは飾らない自分の言葉で伝えること。格好いい表現を口にし、どんなに自分を取り繕ってもほんとの自分の気持ちは伝わらない。ディスカッションを通して、たとえ意見がまとまってなくても思ったことを積極的に言えば相手は全力で受け止めて、更に深い応答が返ってくると知った。自分の言葉で伝えることの大切さ、自分の気持ちは自分の言葉でしか伝えられないことを改めて感じた。

そして、実際に現地で何を見て、何を感じて、何を考えたのかを忘れずにしたい。また、自分は何に興味を持って、自分が何を伝えていきたいのか少しずつ分かった気がした。自分は何のために生まれて、何のために生きるのか、そして何のために働くのか、一見単純なようにも思える疑問だか、実はとても深く、難しいものだと気付いた。この問いを追求することは自分にとっての課題となった。私はこの素朴な疑問の答えをこれからの人生の中で探していきたいと思う。

今の日本は人生100年時代だと言われる。しかし、明日が必ずするといった保証はどこにもない。人生いつ何が起こるか分からない。だからこそ、明日のために今日を、今を全力で生きていきたい。人には人それぞれに多様な生き方がある。その中で、私は今を楽しみ、悩み、もがきながらも全力で生きてこうと思う。こんな少し暑苦しいようなことでも胸を張って言えると思わせてくれた人達に出逢うことができた。それぞれが似たような、少し違うような、様々な生き方をし、沢山考えている。そんな人達の中で過ごすことで、自分自身成長することが出来た。

このツアーを通しての出逢いや新たな発見、またこのツアーに出会い、参加したことを大切にしていきたい。



【幸せとは何なのだろうか？】

愛知県立大学 外国語学部 1年生

私がこのツアーに参加した理由は主に三つある。一つ目が発展途上国と呼ばれる国々に対する興味。二つ目がインターンシップ型のスタディツアーであったこと。そして最後に、グループ全員で与えられたテーマに対して討論するディスカッションがプログラムに組み込まれていたことだ。

しかし、このツアーに参加して得た経験や知識は、上記の動機だけではまとめきれないものであった。つまり私が何を言いたいかというと、物事の表面をじっと眺めて、考えるだけでは何も変わらない。実際に手で触れ、肌で感じ、現場の空気を吸うことで、自分にとって新鮮で感動的な記憶の一部として刻まれるということだ。

今でも鮮明に覚えている、ゴミ山で靴も履かず、生ゴミをあさりながら死と隣り合わせの生活を送っていた少年や少女達を。自分にとってあの光景は一生忘れることのできない、忘れてはいけないものだったと思う。あの現場で感じたことは人それぞれだったと思うが、私はその日を境に「幸せ」という言葉の定義に対して深く考えてみた。「幸せ」って何なのだろう、誰がどのような基準で決めつけているのだろう、果たしてゴミ山の子供達は幸せなのだろうか？色んな疑問が私の頭を飛び交う。心が満ちたりていれば幸せだと言えるのか？最終的な解答は未だに分からない。しかし一つだけ言えることがある。それは、幸せとは自己満足心からくるものであり、基準や度合いを決めるのは絶対に自己であるということ。これは他人が口出しすべきものではない。幸せかどうかは自分が決めるのである。ゴミ山で聞いた話が一つ印象に残っている。「ここでの生活は嫌ではないよ。むしろすすんでここに来ているんだ。」と。

自分の価値観を人に押し付けてはいけない。このツアーを通して学んだことだ。自分の知らない場所で同じ歳くらいの子やもっと年齢が下の子が精一杯に生きている。その中で形成されていった各々の幸せの形を崩してはいけない。

たくさんのことを学んでいく中で自分の中で一つ大きな目標ができた。「将来観光省で働いてみたい！」「それぞれの幸せを満たすための援助が少しでも、間接的でもいいからしたい！」そう強く思った。今回訪れたカンボジア、ベトナムのみならず、貧困化が続いているアフリカの国々にも目を向けて、大袈裟ではあるが、自分が世界を変えていくぐらいの気持ちでこれから過ごしていこうと思う。



【『考えること』の大切さ】

龍谷大学 経済学部 2 年生

私はこのツアーを通して、ほかの国で起きていることのすべてが他人事ではないし、他人事のように受け止めてはならない、もっと深く考えなければならないことがたくさんあると感じた。

このツアーでは、ベトナム戦争について、カンボジアのポルポト政権時代とその後、そして今のカンボジアを知れるような研修先をたくさん訪れた。どの研修先も、私たちが暮らす同じ地球上で起こった出来事、あるいは今現在起きていることだと思うとなぜか他人事では無いと思うようになった。その考え方が明確になったとともに、私が JAPF の 2 カ国ツアーに参加して一番衝撃を受けたのがカンボジア、シェムリアップにある「ゴミ山」での研修だ。あの日見た光景は今後一生忘れないと思った。ものすごい臭いと、無数に飛び回るハエ、そしてあたり一面見渡す限りの大量ゴミ、まさしくここが「ゴミ山」だと感じさせられた。事前学習をして、分かってはいたけれど、実際に行ってみるとすべてが想像以上で、「なんであんなところに大量にゴミがあるんだ」とか「なんでここに人が集まっているのか」とか、いろんな疑問が私の中でわいてきた。その疑問に関しては、ツアーを通じて、ゴミ山ができるまでの経緯や、ゴミ山の現状について教えてくれる人がいたので少しずつ解消したものの、『ゴミ山が今後どうなるべきか』についての明確な答えを私は見つけることができなかった。見つけることができなかったというよりは、確実に“なくすべき”だとは思った。しかし、簡単にゴミ山をなくすことができないカンボジアの現状と、そもそもゴミ山を“なくすべき”という考え方自体が私たちの価値観から見た一方的な見方であって、その見方がいつも正解だとは限らない。だからこそ、私たちは正解を探すだけでなく、自分たちに合った方法で新しい正解の形を創ることもしていかなければならないと思った。

私のツアー目標は「ツアーでの体験学習を通じて、そこで学んだことを一般化する」ということだったので、このツアーが終わったからと言って、終わりにするのではなく、このツアーで学んだたくさんの学びを日々の生活の糧としていきたい。

【自らの偏見に気づくこと】

早稲田大学 文化構想学部 2年生

12日間のツアーを通し、日本と異なる風景や生活、生き方をする人々を多く目にした。あまりに違う環境に驚き、私の知っていた世界や価値観に疑問や違和感を覚え、これまでの価値観は偏っていたのではないかと自問自答した。先進国が支援の際になぜ自国の国旗を立てる必要があるのか、そもそも支援は必要なのか、彼らは本当に貧しいのか、、、これら様々な疑問や違和感を解消できたとは言えないが、それに気づき、参加者とその違和感を共有し、話し合えたことこそがこのツアーの収穫の一つであったと考えている。

これらの違和感の中で特に教育について取り上げたい。なぜなら教育は参加者と最も深く話し合うことのできたテーマだからだ。まず初めにそもそもなぜ教育が必要なのかということに問題を設定する。

教育には、国際競争で勝てる人材を作るために国が実施している大規模な洗脳的側面があるのではないかと私は考えている。私たちが受けている教育は資本主義、市場経済の世界で生きていくために必要とされている資質を身に付けることを大きな目的としているように思う。ポルポトの考え方に近いのではと自分で感じてしまうほどではあるが、この考えに立てば、教育がないからかわいそうという考えはどこまで正しいか疑問に思えてくる。彼らは資本主義による洗脳を受けずに済んだ数少ない人々なのかもしれないのだ。

しかしながら、資本主義や市場経済が生んだ構造的な不平等に彼らが巻き込まれることで、彼らが弱者であるかのように見えてしまい、教育支援を行う団体が数多く存在している。このような社会ではやはり教育を受ける必要はあるのかもしれない。それでも、教育の在り方はもっと多様であるべきなのではないだろうか。

例えば価値が見直されても良いと感じる教育の場として、宗教施設が挙げられる。生活の場との心理的、距離的近さが理由だ。ほかにも、指導者や教材を乗せたトラックが村々をまわるような移動式の学校があれば彼らのニーズを満たすのではないかと考える。生計を立てられるようになるための技能を育てると同時に、資本主義社会で生きるために必要な能力の習得を目的とした移動式の学校は、通常の学校を建設するよりも初期費用が少なく済み、生徒も少数であることが考えられるため、教員の数が少なくても運営できるのではないだろうか。

以上、少々偏った意見だが、この問題は資本主義や格差、貧困など様々な問題に派生し、応用することのできるテーマではないかと考える。

12日間のツアーで心に残った研修先や光景は挙げればきりが無い。それでも、どの研修先でも共通して印象深かったのは人々の笑顔であった。目が合えば笑顔で返してくれること。日本では当たり前とはいいがたいことを自然にしていること。これを目にしたとき、



私たちの世界や当たり前感じていた環境、価値観は狭く、偏ったものであるということ
を思い知らされた気がした。自分の価値観や周りの環境は偏っているかもしれないと意識
することこそが異文化理解、そしてその先にある支援につながる第一歩なのではないだろ
うか。

【自分の価値観を傍観して】

福岡女子大学 国際文理学部 2年生

私がツアーに参加しようと思った目的は、価値観を刺激することだった。ベトナム、カンボジアに触れ、参加者と高め合うことで自分の価値観はどのように刺激されるのか興味があった。ツアーを終え、この論文を書くにあたって参加前と後で変わったものは、次の通りだ。

- ① ベトナム・カンボジアに対する印象
- ② ベトナム・カンボジアに強く影響をもたらしてきたとされる大国（アメリカ・中国・ロシア）に対する影響
- ③ 四季の有無による国民性の違いの存在、また価値観の違い

① は、都心部の街並みやマーケット、レストランの様子から感じた。テレビで紹介されるものだったり、貧困ビジネスが生まれたりするほどカンボジアと貧困は密接な関係であると思っていたがそれはあくまでも側面の一部だったようで、今の日本には珍しい街のエネルギーを感じることができた。②は、戦争証跡博物館やキリングフィールドなどで戦争の歴史を学ぶ上で感じたことである。命を命と思わない、おぞましく残酷な戦争の行為全てが、もう二度とおきないようにと願った。もちろん大国ばかりが悪いわけではなく戦争に優劣も勝敗もないが、今まで何人の命が大国の利益のために失われてきたのだろうと考える。国と国との問題は、非常に多面的で多くの要素が複雑に絡み合っていることを学んだ。指導者の立場にある人も、迷いながら苦しみながら決断するのもかもしれない。選挙という手段で国に意思表示ができる環境にいる私たちは、その権利を無駄にすることなく平和を貴んでいくべきなのだろう。③は、sui-johの浅野さん、クラタペッパーの倉田さんが仰っていた四季の有無による国民性の違い、また価値観の多様性についてである。これは私がツアーを通して最も印象に残ったことのひとつであり、これからも考え続けるトピックになるだろう。国民性の違いがあるのはなんとなく創造していたが、それと四季の有無とが関係しているという考えには本当に驚き、また納得した。学校の日本人の友人でさえ考えの不一致で悩むこともしばしばだ。画一化される世界でこれから働くうえで、価値観の違いをどう上手く乗り越え、利用していくか。そこが、人生の楽しさにもなるだろう。

これまで変わったことを述べてきたが、一方で変わらず、より強固になったものがある。それは自分を認める感情、自信である。色々な人が、色々な暮らしかたで逞しく生きて、自分の夢を叶えようとしている。カンボジアの人々や参加者、引率からそういったものを感じ取り、私はそれを受けて自分は自分でいいのだ、と安心する共に自信がより一層強くなった。

多くの知見と貴重な経験、時間、巡り合わせを施してくれたこのツアーに感謝してい



一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

る。



【本当の支援ってなんだろう？】

津田塾大学 総合政策学部 2 年生

何不自由ない生活ができる日本に生まれ、当たり前のように小学校から高校まで教育を受け、大学に進学した。しかし、大学へ入って色々な物事を深く知るようになり、視野が広がることで、私が今まで生まれ育ってきた環境は非常に恵まれていたもので、世界には毎日を本当に苦しみながら精一杯生きていて、支援を求めている人が大勢いることを知った。私の毎日の生活は当たり前ではない。途上国の人々は、どんな問題を抱えていて、どんな支援を必要としているのだろうか。私はその人々にどのように関わられるのだろうか。今、日本や世界の先進国がやっている援助は正しいものであるのか。本当の支援を見つけるために、まずは途上国の現状と課題を知ろうとこのツアーに参加した。全国から集まった初対面の仲間と 12 日間濃密な時間を過ごした経験は、私の人生で宝物になった。

最も印象に残ったことは、孤児院の訪問だ。孤児院に行く前の私がカンボジアの孤児たちに抱いていたイメージは、なんとなく「可哀想な子供たち」だった。親がいなくて、昔はゴミ山で生活していて、みんな将来に希望が持てていない…。しかし、実際に関わってみるとこのイメージが 180 度変わった。子どもたちはみんなすごく笑っていた。みんな今を生きることが本当に楽しそうで目が輝いていた。今ある環境の中で全力で生きていた。その姿は眩しかった。私はこの子たちの笑顔を消さないために何ができるのかを考えた。たくさんの方がカンボジアに経済援助をしたり、ボランティアを派遣したりしているが、それは本当に現状を把握した上でのニーズにあっているものなのだろうか。お金だけの支援ではいつか限界がくるだろう。子どもたちに、たくさんの方の経験をさせてあげてたくさんの方の夢を見せてあげたい。機会を、希望を、与えてあげたい。どうにか「生きる希望」を持ち続けていてほしい。また、ゴミ山の訪問も衝撃だった。「臭い」どころではない。あまりの激臭に呼吸ができなかった。現地の人に話を聞きたくても、もう限界で聞けなかった。こんな場所で人間が生活しているなんて信じられなかった。トゥールスレン収容所やキリングフィールドでは、カンボジアの残酷な歴史に絶句した。

このツアーに参加して、自分の感情と向き合った。現地で現状と向き合い、自分の揺れ動く感情と向き合い、そこから支援が生まれると思う。それが支援の原点になってくる。「僕たちは世界を変えることができない。」一人の大学生がカンボジアのために動いても、カンボジアはビクともしない。だから多くの人にカンボジアで自分と向き合う体験をしてほしい。カンボジアの魅力を知ってもらいたい。誰かのために尽くす喜びは非常に大きいこともあることを伝えたい。それが本当の支援につながってくるだろう。カンボジアは人と人との繋がりが暖かく、笑顔がたくさんあった。本当に素敵な国だった。カンボジアが大好きになった。カンボジアが今後、どのように発展していくのか、非常に楽しみである。この先、カンボジアには何が待っているのだろうか。



【今回の経験を通して】

愛知大学 国際コミュニケーション学部 2年生

私は今回このツアーに参加して、本当の豊かさとは何かということを常に考えさせられた。ツアーに参加する前は豊かさというワードについて考えたときお金が多くあることだけが豊かにつながると思い込んでしまっていた。しかし、様々な場所に訪れ医療面、教育面、文化面など多方面から考えることで豊かさにも精神的な満足度のような様々な種類があると感じた。また、発展途上国だから豊かではないという考え方は間違っていること実感した。支援という点から言うと、以前は私たちが現地で伝え、助けるというイメージが強かった。しかし、実際には私たちが教えられること、見習うべきことも多くあり、本当の支援とは何か、私たちがやれることは何かということを改めて考えるようになった。

多方面から見たときに私は幼い頃からの教育の基盤がしっかりしていることがとても重要であり、それによって国民一人一人の生活水準の向上や国の発展など広い範囲での問題にもつながっていくと感じた。しかし、現在のカンボジアの教育問題は農村部と都市部での格差があり、学びたくても学べない子供たちもまだ多くいるということがわかった。TAYAMA 日本語学校、孤児院、農村の中学校などの教育現場を視察して感じたことは個人個人それぞれが純粋に何かを知りたいという好奇心が強いということだ。また、勉強することの楽しさを感じ、将来の希望のような目的意識をもって学んでいる子が多くいるのが印象的であった。その好奇心を潰さずに平等な教育環境を作り上げていくことが大切だが、それがどれほど難しいのかということを考えさせられた。

また、医療問題や歴史的な問題もあるがそれぞれの問題点を見つけるだけではなくその問題をどのように工夫すれば改善されるのかを考えなければならない。それを他国がサポートをする際にすべてを伝え、行って終わらせて解決するのは支援される側のためにならず、よりよい改善は望めないと考える。基盤としての知識をあたえ、きっかけ作りをして後は支援される側が後世にもつなげるような努力を続けていくことで発展していくものだと思った。私は支援というと支援する側の自己満足というようなイメージを持ってしまっていたが、サポートされる側とする側が相互に信頼しあっていることがとても重要だと感じた。

今回の経験を通して、日本で生活していると当たり前だと思ってしまうことが多くあるがそれは当たり前ではなくとても恵まれた環境で過ごしているということを忘れてはならないと改めて思った。その当たり前の環境という思い込みから日本人の心余裕の無さや日々感じる満足度が低くなっているように感じる。また、同時に実際に自分の目で見て知ることの大切さを実感した。だが、知るだけではそこで終わってしまうのでその国の現状などこのツアーで感じたことや知ったことを生かして新たな行動を起こすことから本当の支援が始まると考えた。



【カンボジアスタディツアーに参加して感じたこと】

神戸学院大学 グローバルコミュニケーション学部 1年生

私はこのカンボジアスタディツアーに参加してカンボジアに対する考え方が大きく変わった。スタディツアーに参加する前は貧困、物資不足など暗いイメージしかなかった。しかしカンボジアに実際に行き、自分の目で確かめると今のカンボジアの現状を感じることができた。カンボジアは実際に貧困や物資不足などの問題があるが、今まさに発展している最中なのだ。

私がカンボジアに行き一番印象に残っていることは、カンボジア人の人柄だ。カンボジア人はとても優しく、やる気に満ち溢れている。これはどこに行っても感じた。例えば、バイヨン中学校の教師のチア・ノルさんは私たちのためにお弁当を用意して下さり、バイヨン中学校についてお話される際にスライドを作って下さり、暑い中私たちの質問に最後まで答えて下さった。また、バイヨン中学校の教育を向上させるために、教師を年に一回日本に研修に行かせたりするなど多くの取り組みをしていた。他にも現地ガイドさん、レストランの店員さん、ホテルの従業員の方などあらゆる場面でカンボジア人の優しく、やる気に溢れた人柄を感じることができた。私は、カンボジア人は心が豊かなのだと思った。豊かさには、物の豊かさと心の豊かさがあるが、カンボジア人は、物は不足しているが心は豊かだと感じた。これは日本と逆だと思う。日本人は、物は豊かだが心は貧しい。物が豊か過ぎると心は豊かになれないのではないかと思う。

カンボジアスタディツアーに参加し、色々な場所を訪問し、多くの問題があることを感じた。例えば、医療の問題、ゴミ山の問題、貧困の問題、教育の問題など解決しなければならぬ問題が多くあるが、一度に全てを解決できないので一つ一つ解決していく必要がある。都市部の建設中の高層ビルや観光省の方のお話を聞くと、今カンボジア政府は都市部の発展や観光業を盛り上げることに力を注いでいるように感じる。しかし今は先ほど私が挙げた問題を先に解決するべきではないか。国の土台となる問題を解決しないと国の本当の発展に繋がらないと私は思う。医療の問題、ゴミ山の問題、貧困の問題、教育の問題を解決するために根本的に足りないのは資金だと思う。訪問先の多くで資金不足だと聞いた。しかし、資金不足に対する解決策が寄付だけに頼っているという現状がある。しかし寄付だけに頼るのは無理があると思う。やはり政府が資金援助をする必要があると思う。政府が資金を調達するために、現実的に考えると、観光業を盛り上げ、観光客を集め、お金を落としてもらうことなどが必要だと思う。だからまずは観光業などで資金を集め、国の土台となる問題を解決していけば良いのではないかと思った。

私はこのカンボジアスタディツアーに参加して新しい事をたくさん学んだ。それと同時に自分の知識不足や無力さにも気づいた。私が今できることは、寄付と今のカンボジアの現状を伝えることだと思う。また、このカンボジアスタディツアーでカンボジアの魅力に



たくさん気づいたので、またカンボジアに行きたいと思った。

【幸せの形】

同志社大学 文学部 2 年生

私はこの 1ヶ国ツアーに参加して、今まで生きてきた社会、そして世界を改めて考え直すことが出来た。東南アジア諸国の中でもあまり知ることのできなかつた国カンボジアを通じてのものである。

このツアーに参加する前の私のカンボジアの印象は、貧しい国、アンコールワット、そしてキリングフィールドぐらいだった。特に貧しい国のイメージが強くて、プノンペン空港に着く前までも否定的なイメージを持っていた。あの時の自分の姿を振り返ってみると自分がどれだけ無知だったかを考えさせられる。

安易に断定していたカンボジアは、漸進的に発展を成しつつあった。街の風景や人の服装だけを見てもそんな感じがした。多くの外国人観光客が訪れるアンコールワットも同様であった。しかし、そんな都心を離れて地方の方に行った時は貧富の差が激しいことも実感した。ゴミ山や農村がそういう面においては最も印象に残っている。そこで私は幸せと格差に基づいた上でカンボジアを見ることにした。

最初、私はカンボジアの現代史からその答えを探ろうとした。フランスによる植民地時代から王政、共和政、クメールルージュ、内戦、そして今に至るほど、ある意味では激動と混乱に満ちた社会像をも経験している。しかし、それにもかかわらずカンボジアの人々はとても幸せそうに見えた。なぜなのだろうか、とまた自分に問った。その時に自分の中で出した答えは、「幸せの基準は人それぞれである」とのことだった。

そもそも普段の我々が考える幸せの基準も人それぞれである。ある人はお金、ある人は家族や友人等様々な答えが出てくる。普通の私たちもそうなのに、開発途上国の人々は不幸であるとは限られないのだ。

確かに生活環境から鑑みたら不幸に見えるのかもしれない。不衛生な環境で働く人々やまともに学校に行けない子供たちを想像するとどうしてもその方向で考えてしまう節はある。しかし、彼らは我々が思うより奥が深く、むしろもっと幸せそうに見えた。もうしかしたら私は偏見に満ちた目線で見えてきたのかもしれない。

そう思ったのは孤児院や農村で子供たちと遊ぶ時だった。裸足でサッカーをやったり、木を登ったり、平気に土まみれになっても笑顔を忘れず、幸せそうに見えた。自分だったら危ないから靴を履いたり、汚いから体を洗おうとしたりしてあらゆる言い訳をつけて避けようとしたはずだ。物がすべてを左右するという考えは、ここで少し破れた気がする。

しかし、教育面においてはまだまだ対策が必要だと感じた。教育制度が他国とは異なる二部制だけあって、勉学に集中しようともできない環境に子供たちが置かれていると考えている。国の将来を背負う人材でもあるので、そういった面においては格差を無くすべきだと思っている。



8日間、あらゆる分野から自分がすべき事を考えた。その時に学んだものはとても多い量で、今でも消化されていないところがある。そこから感じる自分の無気力さをどうにか解消し、前へ進められることを切実に願ってやまない。



【当たり前とは】

徳島文理大学 保健福祉学部 2年生

今回のスタディツアーに参加して、当たり前とは何か考えさせられた。見て聞いて感じて、いままでの当たり前が当たり前ではなくなった。

日本では当然のように小学校や中学校を卒業し、高校に進学する。卒業すれば大学に進学し卒業したら社会人となって働き始める。当たり前のようにレールができていて、特に疑問を持つことなくこの通りの道を多くの日本人が歩んでいる。もちろん私もそのうちの一人だ。しかし、カンボジアでは違う。特に都市部から離れた場所では、全員が小学校に行くわけではないし小学校を卒業する時の人数は入学した時の半分以下、卒業したとしても中学校に進まない人がいるというのが現実でありこれが当たり前となっている。さらに、授業は午前か午後のどちらかを受けその他の時間は家の手伝いをして過ごすのが当たり前である。家の手伝いと言っても食器を洗うことや玄関の前を掃除するといった日本の小学生の手伝いとは違い、畑仕事などの親の仕事を手伝っている。子供たちも立派な労働力であり、収入を得るためになくってはならない存在だからである。カンボジアでの教育の当たり前は日本では想像することが出来ないものであった。

病院を訪れた際、お金をとると病気だと思っても病院に来てくれないので今はまだ無料で診断、治療を行っていると話してくれた時に医療に対しての知識の薄さと収入面での格差を感じた。裕福な人たちは治療を受けるために外国へ行く。しかし、お金がない人たちが病院行くときは、頭と体と全てが痛くなってからだを教えてくれた時、素直に驚いた。日本では風邪気味だと言って病院に行くし、腕が痛いと言っても病院に行く。それが日本では当たり前であり普通のことであるからカンボジアの当たり前を受け入れるのが難しかった。

今回カンボジアの色々な所を訪れ、話を聞いて日本の恵まれた環境と自分の中の当たり前前の水準の高さに戸惑った。当たり前と思っていたことが他の国から見れば恵まれていることに値するなんて考えたことはなかったがカンボジアでの8日間は、今まででいちばん濃い時間であり、たくさん考えることのできた瞬間であった。当たり前とは何だろう。当たり前を変えるにはどうすればいいのだろうか。私ひとりが行動することでは何も変わらないし、変えることが出来ないのは分かっているが知ることや考えることはできる。もっと知って見て、多くのことをこれからも感じていきたいと思った。



【教育とカンボジア】

早稲田大学 教育学部 1年生

カンボジアは想像以上に発展していた。日本製の車も走り、レストランもある。PR動画で数々の観光スポットがあることも知った。しかしそれは都市部の話で、農村部に行くと様々なところでその格差を感じた。私はその時ようやく「発展」の捉え方が間違っていたことに気づいた。

カンボジアにおける「発展」とは、まず今の段階では「国民が最低限度の生活ができること」だ。ごみを拾って生活する人、病気になっても病院に行けない人、浄化されていない水を口にする生活、ボロボロの服を着ている、教育への理解がない、夢をもつ余裕のない子どもたち…その状況が改善されていくことこそが発展だといえるのではないか。そして発展への鍵を握るのは教育なのではないか。そこに達した後でようやく経済成長など都市部で感じた「発展」へと形が変化していく。意識してはいても日本の当たり前を当てはめていた自分に気づかされた。

本レポートでは教育の観点からカンボジアの今をみていく。

まず孤児院と農村のフリースクールでの子供達とのふれあいでは同じ教育機関でも全く異なる印象を受けた。孤児院の子どもたちは笑顔で無邪気に遊んでいる姿が印象に残っており、上級生がお世話する姿や孤児院ということもあってかひとつの家族のように感じた。一方で、その心には抱えている傷もあるようだった。それに対し先生は子供達と過ごす時間の中で「満たされる」感情を与えること、一緒に何かをする、寄り添うことを大切にしていると答えてくれた。傷を抱えていても強く生きる姿はとてもしっかりとした。また閉ざされた心はすぐに開けないものだが、遊ぶ時柱の陰からじっと見ているだけで輪に入っていない子どもも何人かいたが呼ぶと嬉しそうにすぐにそばに来てくれた。そういったことから日頃の先生の関わり方の素晴らしさを感じたし、そうして考え見詰め、心に寄り添う教育者がそばにいることが嬉しく、安心した。しかし心のケアを十分に行うためには約160人の子どもに対して先生が7人と少ない。普通の学校とは違い、家庭替わりもする孤児院ではより多くの人材が必要だろう。

私は孤児院で貧しいことが心の貧しさに必ずしもつながるわけではないと教わった。その一方でフリースクールでは物が足りないことが心をも貧しくさせてしまうこともあるのだと感じた。みんなで遊べるようにとボールを持ってきたのだが1人の子が握りしめて離そうとしなかったのだ。そこで初めてみんなで遊ぶ楽しさを知らないことに気付かされた。物が少なく、遊ぶものもないからこそみんなで遊ぶ楽しさを知っていると思っていたが、それは教育を受ける中で気づくものだと分かった。遊び方や工夫に自分たちで気付いていくことも大切だが、まず始めの一步は周りが促しサポートする、導く、それも必要で、教育の一部なのだと感じた。

またバイヨン中学校で話を聞いた際、虐殺の加害者、非加害者の子孫同士が同じ学校に通う事実を知ったが、どの学校でも子孫共存のために起こりうる様々な問題を考慮し現在ポルポト時代のことは大まかな流れだけで詳しい話はされていないことが分かった。確かにアイデンティティを確立していく中で自分ではどうしようもない過去に苦しめられる懸念はあるが、過去から目をそらしてはいけない、隠してはいけないと思う。現地の人々にとって収容所やキリングフィールドはどういう存在なのか、その答えを知ることはできなかったが、そこには今だに生々しい死の雰囲気が残っていた。息苦しくなるようなその場所に身を置くことで、その空間で恐ろしさや苦しみ、狂気など様々なものを感じさせられ、考え、想像した。そういった機会を与えることも教育において非常に重要だろう。同じ過ちを繰り返してはならないと強く思うことが未来を変えるきっかけになる。

また都市部では意欲的に学ぶ生徒の姿がある一方で、農村部ではまだ教育への理解があまりないという事実がある。さらに生きるのに精いっぱい夢を持ってない、考えることすらできない生徒がほとんどだという。日本では明日や未来は必ずあるだろうという安心もあり、選択肢も多く頑張れば叶えられるのに夢がない人が多い。日本とカンボジアでは状況が異なるのは分かっているが、その違いには考えさせられた。

誰にでも生きていく上で教育は必要不可欠である。教育を受けることでモノクロのようだった知らない世界は、色づき、生きるのもきつともっと楽しくなるのだと思う。さらに教育をカンボジアで広げるためには人材教育、本や文房具などの物資、学校、教育を受けることへの理解、運営の資金などが必要だ。最終的には自立して発展している国にすることはもちろんだが、永続的な支援も必要である。

レポートでは教育に絞り述べたが多方面からみるからこそ、色々な発見、気づきを得られ物事を理解できるのだと分かった。また研修を通し、教育者を目指す身としてその責任の重さ、重要さ、やりがいを改めて感じると共に、これで終わりではなく研修で見つめた一つ一つを今後も考え続け、さらに発信していきたい。



【カンボジアでの経験を通して】

名古屋市立大学 人文社会学部 2 年生

私がこのスタディーツアーに参加した理由は、「発展途上国の現状を自分の目で見てみたい」という考えがあったからである。ツアーに参加する前はカンボジアに対して貧困国・支援で成り立つ国、というイメージが強かったため、「発展途上国の現状」というものには、もちろん「貧困」や「困難」などの負のワードがつきまとうものであり、人々もそれらに屈して助けを必要としているものだと予想していた。しかし、実際に研修先を訪れたり、現地の人と触れあったりしたことで、今振り返ればなんとも上から目線であった私の考え方は大きく変わるようになった。

私の考え方が変わった大きなきっかけは、TAYAMA 日本語学校での出来事である。バスから降りればすぐに「こんにちは」という元気な挨拶を受け、敷地内にはきれいに整頓された靴箱や駐輪場が見られた。日本語学校の生徒の方々に日本の文化を紹介した時には、一言も聞き逃すまい、という前のめりになって話を聞いてくれる姿が印象的であった。こうした彼らの姿を見てみると、その学習意欲や向上心の高さに対して、一番にうらやましいと強く思った。環境も設備も日本の方が整っているにもかかわらず、彼らに対してうらやましいという感情を持つことは、どこか矛盾しているように思えるかもしれないが、貧困や家庭ごとに抱える困難を理由に勉学をあきらめるのではなく、それを乗り越えるために懸命に勉強する彼らの姿は、非常に尊いものを感じた。

他にも、日本語学校以上に貧困や困難を感じるだろうと予想していた孤児院では、もちろん貧困ではないといえる状態ではないものの、そこにいる子どもたちは私たちの方へ人なつっこく話しかけてきたり、遊びに誘ってくれたり、孤児院にいる子どもたちとは思えないほど活気があふれていた。

このツアーを通して、カンボジアには貧困や問題がはびこっているというイメージは変化していった。もちろん、農村やゴミ山などを訪れたときには、自分だったらこのような生活をしていくことができるか不安になるような状態であり、特に吐き気を催しながらゴミを拾う人々を見ると胸が痛かった。しかし、それだけがカンボジアの姿なのではなく、貧困や困難を解決に導こうとする姿や、他国の支援に頼らず自立を目指そうとする姿も、カンボジアの現状なのであるということがわかった。また、人々は貧困や困難に屈してしまっているのでは、などという予想も大きく変わり、日本語学校の生徒たちの向上心や、孤児院や農村の子どもたちの元気に遊ぶ姿を見てみると、心の豊かさというものを強く感じた。

このように、はじめの予想とは異なる経験を得られたことから、予想なんてものはあくまで自分の考え方や知識の内にしか置くことができなれないものだと改めて感じる事ができたとともに、予想だけで終わらせず、実際に目で見て感じる事の大切さを学んだ。ま



た、引率のお二人や参加者のみんなからもたくさんの刺激を受けることができ、とても充実した8日間であった。これからはこの充実感を行動にうつしてもっとたくさんの経験をしていきたいと思う。



【豊かさについて考える】

名古屋市立大学 人文社会学部 2年生

豊さとは何だろうか。たった8日間ではあるが、自分と明らかに異なる生活をしているカンボジアの人々を見て、何度も考えたことだ。目に見える豊かさ、目に見えない豊かさ…。豊さの定義は環境やその人自身によって違ってくるだろうが、豊かさには連鎖が必要だと思う。

Sui-Johの浅野さんは、カンボジアに行きさまざまな経験をし、心の豊かさを得た。その経験や人とのつながりで、Sui-Johを企業し、商品という豊かさになった。その商品を購入した人々にハッピーを届け、心の豊かさとなる。色んな豊かさがさらなる豊かさを生むのではないかと考えた。“カンボジア 農村”で検索すると、貧しい・かわいそうなどマイナスの内容が多く見られる。しかし、浅野さんが仰っていたことで印象的だったことがある。カンボジアの農村の人たちは、モノはないかもしれないけれど、家族と近くてゆっくりと穏やかな生活をしている、ということだ。この視点から見ると、農村の人々＝かわいそうは全く成り立たないと思う。穏やかな心の豊かさがあるからこそ、また豊かさが生まれる余地があるのではないだろうか。

そうはいっても心の豊かさだけでは、限界が来ることもある。孤児院とHOPE医療センターを訪問したときに感じたことである。両方とも支援金で成り立っているらしい。孤児院では、他にも教科書・ノート・文房具などスクールマテリアルが不足している。私たち日本人にとっては、教科書は当たり前前に学校から配られるもので、文房具も不自由なく買うことができるのに。勉強をしようにも、これらは基本のキではないか。教育を受ける者にとっての当たり前の権利のように思っていた。これらの不足は、教育における豊かさの連鎖の妨げになってしまうだろう。HOPE医療センターでは、医療機器の古さやデータ・統計の曖昧さを感じた。ツアーのメンバーから、さまざまな質問が出たが、「調べていないからよくわからない」という回答が多かった。また医師の不足も深刻な問題である。医療が患者に施されるには、まず医師が必要である。根本の医師がいなくては、医療における豊かさも広がっていかないだろう。

モノの豊かさ、心の豊かさどちらかに偏るのはあまりいいことではないだろう。豊かさの連鎖を潤滑にするには、モノと心のバランスが必要である。またバランスだけでなくそれらの質も重要であると考えます。

私がこのスタディーツアーに参加したのは、ただなんとなく、であった。強いというならアンコールワット見てみたいなあくらいの薄いものだった。しかしこの8日間はあまりに濃く、刺激的だった。日本という狭い世界でいくら机にむかって勉強しても得られない経験

を得た。百聞は一見に如かずとは、まさにこのことである。そして、日本人の当たり前という一つのものさしだけで物事を理解しようとすることの危険性を感じた。今回のツアー



の引率とメンバーもとても素晴らしかった。互いを高め合い、自分ももっと頑張らなくては、と思わせてくれた。このツアーだけで終わらせるのか、またはそれを今後連鎖させるのか。自分次第である。



【カンボジアの現状】

名古屋市立大学 人文社会学部 2年生

初めてカンボジアへ行き、日本との違いに日々驚かされた。自分が当たり前だと思っていることが実は当たり前ではなかったことが幾つもあった。このツアーに参加する前、カンボジアはとても貧しい国だというイメージがあった。しかし実際にカンボジアに来てみると、「貧しい」というネガティブなイメージとは裏腹に、街は活気にあふれていた。最初に向かったプノンペンには夜遅くまでネオンが輝き、車やバイクで埋め尽くされた道路の脇には小さなお店が所狭しと並んでいた。カンボジアはイメージよりもはるかに発展した楽しく賑やかな国であった。しかし様々な研修先を回る中で、私はカンボジアにちぐはぐさを感じた。

なぜこの感情を抱いたのか、カンボジアを見て感じた問題点が大きく分けて3つある。

1つ目は国内の貧富の差である。プノンペン（首都）とシェムリアップ（農村）では街の様子が大きく異なっていた。交通の面では、前者は舗装された道路に高級車やバイクが走り、電線もたくさん引かれていた。一方で後者は舗装されていないがたな道を主にバイクが走り、電線の数はかなり少なく、まったく電気の通っていない地域も多々あった。住居の面では、前者はビルが立ち並んでいるのに対して後者は高床式で簡単な作りのものが多かった。着ている服、特に靴は両方で大きな違いがあった。農村のほとんどの子ども達は靴を履かず裸足で生活していたのだ。

2つ目は都市における海外企業の進出である。SUZUKI や TOYOTA、三井住友銀行などたくさんの日本企業がプノンペンに進出していた。また日本企業だけでなく、街には中国語の看板が数多く掲げられ、中国企業による高層ビルの建設も行っていた。プノンペンのイオンモールへ研修を兼ねて訪れたが、中に入っているお店は和食や中華、韓国料理、ファストフード店などが目につき、カンボジアのお店はあまりなかった。プノンペンの街並みには海外企業が目立ち、いつかこの街は海外企業に乗っ取られてしまうのではないかと一抹の不安を感じた。

3つ目は教育に十分な資金が回っていないことである。今回のツアーで訪れた TAYAMA 日本語学校、CCH、バイヨン中学校、農村にあるリースクールではいずれもお金に困っているというお話を聞いた。政府の分配する資金だけでは不十分で、必要経費の大半を寄付で賄っているようだ。しかしそれでもなかなか厳しい様子だった。

このちぐはぐさの根本にあるのは、3つ目で指摘したことにもつながるが、教育を軽視している傾向があるからではないだろうか。カンボジアは海外企業を誘致しインフラを整え、外国人をたくさん呼び込もうとしているように感じた。それは重要なことだとは思う。しかしもっと政府が教育に力を入れて自国民の力を伸ばし、「海外企業が」ではなく



「カンボジアの国民」が国を引っ張っていくようにすることが今後のさらなる発展に繋がるのではないだろうか。また、農村など地方の教育を強化することは都市と地方の格差拡大を抑えることになり、国の安定にも繋がるのではないかと感じた。



【カンボジアがするべきこと、自分ができること】

摂南大学 外国語学部 1年生

今回、自分がこのツアーに参加した理由は自分の価値観の見直しであったり、カンボジアってどんな国など些細な疑問だけで参加を決めました。実際ツアーに参加して自分の価値観が変わったり、どのような国かは少しではあるがわかった。また、今のカンボジアが必要なことや今後どのようにしていかなければならないか考えさせられる機会が多く、今のカンボジアに必要なことや自分がカンボジアにできることの考えが決まった。

まずカンボジアに必要なことは教育である。インフラ整備や生活水準の上昇ももちろんこれからのカンボジアにとって、どれも欠けてはならない課題問題であるが、私はよりカンボジアが進化するには教育面での成長だと感じた。けれども、今回の研修先を通して気づかされたことは金銭的な不足が根底にあるので教育など様々な問題につながってしまう。研修先で「学校の生徒に使える一人当たりのお金は2ドルという少量の額しか使えない。」といていた。しかも、「カンボジアでは小さい子供でも大事な労働力なので働かすしかない」といていた。まだまだ金銭的な支援も重要だし、生活水準の向上も必要不可欠だ。けれども、もっと重要なことは親が教育の重要性をもっと理解しなければならない。研修先で、親が教育の必要性を理解していないことが多いといていた。まず、そこを変えていかないといけない。カンボジアの子供たちは、研修を通して、勉強が好きであったり、勉強に真剣に取り組む姿勢を感じた。なので、よりカンボジアの子供たちに将来の道を増やすためにも、学校で優秀な子を日本で無償で勉強を教えたりすることもいいと考えた。そうすることで、より勉強への意欲も高まりやすい。

そして、次に今自分がカンボジアにできることは勉強して自分の能力をあげることである。カンボジアにとって、今の自分にできることはいっぱいある。募金活動であったり、カンボジアの現状を伝えたり様々なことがある。けれども、自分が今学生という立場でできることは勉強である。私は日本というほぼ勉強に困らない環境である。将来カンボジアに何か力になろうと思った時勉強を教えたいと思った。けれど、今の自分では知識不足であり、英語力のなさを今回のツアーで感じた。そのためにも、いまの自分は日本という素晴らしい環境に恵まれているのでより勉強をしなければならないと考えた。

最後に今回のツアーを通して、本当に色々な考え方が変わった。そして、今後、将来的にも今何をしていかなければならないこともわかった。今回のツアーでの経験は自分にとって大きく変わった機会だ。今後、この経験を通して、世界に役に立つ一人として頑張っていこうと決めた。



【スタディーツアーを通して学んだこと】

中央大学 法学部 2 年生

私は今回のツアーを通して知ること、そして知った先でどう行動できるかが大切であるということ学んだ。

第一に知ること、自らの見識を深める上でとても重要な要素であると考えます。私はこの大切さを特に歴史の観点から強く感じました。トゥールスレン収容所やキリングフィールド、アキラ地雷博物館ではポルポト政権についてのあらゆる見解を聞くことができました。政権が行った大量虐殺や監禁は決して許されるべきものではないが、ポルポト政権が誕生した背景やその意図をたどっていくと必ずしもそれが悪であるとは言えない部分があるということ強く感じました。さまざまな問題を抱える国際社会の中で私たちは自らの育った環境や習慣で先入観を持ってしまいがちであるように感じる。しかし、一つの問題に対しても考え方は多種多様にあり、完璧な正解はないと思う。そして色々な世界を知り物事を多面的に見ることで自分の中の価値観が変化し、それが寄り添い合う力へと変わっていくと考える。

第二にこれから生きる私たちにとって未来をよりよくすることは大切な使命であると考えます。私は今回のツアーでカンボジアの格差社会を感じました。都市部の街中には上層ビルや巨大なイオンが立ち並び今後国際競争の中で大きな役割を担うようにも思えたが、一方でゴミ山や農村では明らかな雇用、物資の不足を目にしたからだ。また、政府はカンボジアを海外に売り込むための観光業や都市開発には精力的に取り組む一方で、農村部の教育支援や日々深刻化していくゴミ山の問題に関しては目を背けているように感じた。私たちは知ることを通じて表面的なカンボジアの発展だけでなく、その一方で進みつつある格差社会について学習することができたが、これは知識を深めて自らの引き出しを増やすという点で私たちにとっては大きな利潤になるが、カンボジアに対して何か変化を与えられた訳ではない。それでは真の意味でツアーに参加した意義を達成することはできないのではないかと考えた。その意義を達成するために知った上で客観的に問題を捉えて解決しようと行動することが大切であると考えます。

第三に行動に移すために必要なことは何かを考えた。そのヒントは Sui-Joh での浅野さんの言葉にあった。「本質的な失敗は行動しないこと」、「夢は大きい方がいい」。私はこれらの言葉から“成し遂げたい”という強い情熱が行動力を突き動かすと感じた。また、特に印象に残ったのが「失敗にはメリットしかない」という言葉だ。ただ強い想いを持っていても私たちはその先にあるリスクや失敗を恐れて行動に移せていないと感じた。しかし失敗の先に新しい出会いや、解決へのヒントがあるとすれば私は失敗することこそが成功への近道になるのではないかと考えた。

私は今回のツアーを通して、世界を変えることは難しいと改めて思い知った。カンボジ



アで感じたゴミ山や教育、医療の問題のどれをとってもあらゆる分野の問題が複雑に絡み合っていると感じたからである。しかし、ツアーを終えた今私たちには知識を持って行動する力と挑戦できる環境がある。このインターン活動は終わってからがスタートであると思う、まずは自分のできることに日々情熱と自信をもって行動していきたい。



【国の発展について】

東京農業大学 応用生物科学部 2年生

私は、今回のツアーでカンボジアの様々な面に触れ、得られた知識と経験を日本のものと比較した際、カンボジアの発展は現在の先進国の発展の全く異なった形をしていると感じた。

第一に、国内での大きな格差を感じた。確かに資本主義をとっている先進国でも収入の格差は問題となっている。しかし、カンボジアで感じられた格差は異質であった。カンボジアの栄えている都市部は、国外企業の参入が多く、カンボジアらしさのある店舗は少なかった。国外企業の店舗が多いため、一見栄えているように見えるが、それはデメリットも多く含まれているように考えられる。例えば、依存してしまうことによる文化の損失や、撤退による経済的損失である。上流階級の汚職も国外企業の広がりに関係しているようである。また、都市と都市を結ぶ、真っ直ぐ伸びる高速道路も気になった。いまだ公共交通機関が整っていないカンボジアでは、この高速道路による物の移動、人の移動が盛んになり、高速道路に接さない場所との格差が大きくなると懸念した。チア・ノルさんの仰っていた、ポル・ポトの国全体の平等を目指した志自体は間違っていない、方法や他国、周囲の環境が良くなかったという考えに通ずるのだと思う。

第二に、国民の寄付を主と考える経営、運営のやり方である。確かに、貧困国アピールを発信し続けることでボランティアや寄付、援助に頼る方法は簡単である。援助をする側の国々が貧困国や、自国と異なる環境を認識し、認め合うことは重要だ。しかし、国の中枢である観光相での寄付を前提とした運営の話聞いたとき、いつまで現在の状況が続くのか疑問に思った。ゴミ山の存在を認めているにもかかわらず、何の手も打っていない政府、病院やインフラの整っていない環境が、国全体の寄付が当たり前の状態を蔓延させたと考えている。国家が、医師の免許をたったの一年で取得できるようにした愚策を例に挙げると、政策を判断し、国を動かす上層部の想像力の低さが目についた。たかが学生風情の私などには到底理解できない事情があったのか分からないが、国のトップの判断力や初期の判断の重要さを感じた。

以上のことから私は、国の発展には段階を要すると考えた。国の発展を衣食住の安定、向上としたとき、ある一定の水準までは人口の増加で発展できると考えた。一定の水準以上は壁にぶつかることでしか進めず、それは戦争や疫病に相当する。その中で育まれた宗教や技術等の、独自の文化は唯一無二のものである。カンボジアの場合は、ポル・ポトの時代で文化が失われ、国の発展が他国と比べ著しく損なわれてしまった。教育者や指導者が揃っていないまま、段階を飛ばし必死に他国を意識した政策をとったため上記のような歪な成長を遂げてしまったと考えた。これから私が学んだ教訓は物事を客観的に捉え、長い目で判断することである。判断を間違えてしまうと、そのあとの行動を間違え、差は広



がる一方だと考えた。正しい判断を行うためには、知識と経験、周囲の協力が必要となる。今回のような他文化に触れる、考える機会を大切に、挑戦していこうと思う。自分のことを精一杯、全力で行動し、周りに影響を与えていけるようになりたい。



【自分の知っていることが全てなのか】

麗澤大学 外国語学部 2 年生

まず始めに今回 JAPF インターンシップ型スタディツアーに参加でき充実した 8 日間を送ることができたことに感謝する。又自分の力不足な面を実感することができた。自分が簡単に思っていたことが今のカンボジアでは難しい状況にいること。さらに当たり前だと思っていた自分が恥ずかしく思った時もあった。

カンボジアの歴史についての固定観念が高校の世界史の知識で学んだことのみで自分の中で形成されていた。ポル・ポト政権によって大虐殺が多く行われカンボジアにとって負の遺産、負の歴史で刻まれた恐ろしい出来事。そこまで知っていて深掘りもせずにとある小さな国の歴史の一部として簡潔に理解していたことで真実や現地の方が今その歴史とどう向きあっているのか考えもせずにはいた。家族、友人の命を奪った悲惨なことで被害者側の気持ちのみを汲み取っていたが、今まで加害者側の目線で見ることがなかった。ポル・ポト＝非人道的な独裁的な政治を行なった人物だと解釈していたがツアーを通して少し考えが変わった。平等で平和な世界を彼も望んでいた。だがその取り組み方が過激で違った方向に向いてしまったと言う話を聞いてから自分も戦争や格差のない世界を願う 1 人として胸が痛くなった。一方的に虐殺したのではなく、彼なりの思いがあって行なったことに自身の学習不足と様々な観点で見える力が欠けていたことに気づかされた。今のカンボジア人の話を聞いて驚かされたこともあった。それはアキラー地雷博物館でアキラーさんが当時に対して意見した時だ。アキラーさん自身も教師だった父が処刑されポル・ポトに対して憎しみの感情が出るはずと予想していた。彼の口からは「彼はいい人だ。」と一言。彼も平和を願っていた人の 1 人でそれよりも自分が過去に少年兵として戦っていたことに自責の念を感じていると答えた。そして彼ポル・ポト 1 人で行なっていないということ。私はポル・ポトのみがクローズアップされ歴史の真髄まで知ることができていなかったことに悔しさを覚えた。

これらのことから歴史に関する教育を丸呑みにしてはいけないということ。それが全てを語っているわけではないことを理解した前提で学び、さらに疑問を持つことによって歴史教育の理解度も深まるのではないかと考えた。さらに語学を専攻する身としては語学力の向上だけでなく、歴史の知識も蓄え、周りの人たちとシェアをしながら自分の考えを深めていきたいという意欲も芽生えた。

今まで考えたことのなかった分野に触れる機会が増え、全国から同世代の人達とディスカッションを真剣に取り組むことが貴重であり素敵な出会いだと感じた。自分が知らなかった世界を見ることができたような感覚で新鮮であった。この気持ちを大切にし残りの学生生活も有意義に過ごせるよう努力していきたいと思う。

【過去と現在から見据えるカンボジアの未来とは】

九州大学 工学部 3年生

今回のカンボジア研修を通してカンボジアが予想以上に大きな社会問題を抱えていることを認識することができた。それらひとつひとつの問題に対してどうすれば根本的な解決になりえて将来のカンボジアの発展につながるのだろうか日々考えさせられ参加メンバーと何回もディスカッションを通して話し合った。

初めの社会問題は都市部と農村部での大きな格差問題である。都市部では年々目新しい建物が建っており海外企業などの積極的な進出により経済面では急上昇を見せている。その一方で農村部では教育を受けられない子どもが多数おり生活するだけで精一杯の状態である。この現状に対して農村部では彼らの必要最低限の生活を保証してあげることが大切であり都市部ではよりソフトな支援を行うことで海外企業に頼ることのない現地の力を育んでいかなければならないと感じた。

次に深刻な環境問題や孤児院の問題があげられる。ゴミ山に行くと重ねてマスクをしても耐えられないほどの劣悪な環境であった。そこで日々ゴミを集めて生計を立てている人がものすごく多くいて、そのほとんどがゴミ山に依存している状態である。この問題解決には単にゴミ山をなくすだけでなくそれによって彼らの生活を奪うことがないようにその後のケアも必要である。また孤児院ではそこに通う子供たちがビジネスの手段になって正当な教育を受けられなかったり、そもそも孤児でなかったりする。また、孤児院を卒業した後社会でやっていけるのかという懸念点もある。そのために国レベルの大きな機関が適切な対処をとったり、国や大学が孤児院と連携して自立できる大人を育てなければいけない。

最後にポルポト政権時代に起こった悲惨な歴史による社会構造の欠如があげられる。もともと発展しつつあったカンボジアが原始的共産主義を掲げて多くの知識人を虐殺したことにより国が衰えて、現在医師や教師の不足が深刻な問題となっている。この問題ではまず二度と同じような出来事が起こらないようにするために正しい知識の共有や教育水準の向上を常に行っていくべきである。

カンボジアの揺るぎない社会を作っていくためには現地の人々が主体となって作り上げていくべきでありその責任がある。そのために私たちは上にあげた大きな社会問題に対して当事者意識を持ちながら現地の人々を主体としたサポートをしていく必要がある。それは寄付だけでなく彼らが自立できるという目標を達成できるような支援を行っていかねばいけない。またカンボジアにはユニークな文化や Sui-Joh で見た高い技術といった現地の強みがあり、眩しいほどの笑顔や圧倒されるほどの学習意欲もある。これらの良さを知ってカンボジアに成長の兆しも感じた。また私は知ることにも責任があると思うので何らかの形で貢献できるようにこれからもカンボジアに目を向けて行動していこうと思う。

【様々な視点から考える大切さ】

下関市立大学 経済学部 2 年生

私は、今回の研修に参加したことで、多角的な視点から考えることの大切さを学んだ。

まず、ポル・ポト政権に関連した研修では、被害者の人々がどのような日常を強いられていたのか、どのような残虐な行為をされていたのかという話を聞き、施設を見学した。私ははじめ、それらすべてを被害者からの視点から考え、そのあまりの残虐さと恐怖に、加害者への憎悪を感じていた。しかし、キリングフィールドに展示されていた所長の写真を見たときに、彼の目に光はなく、虐殺をしていた彼らもその行為が本意ではなかったであろうというのがその一枚から痛感させられた。その中で彼らは今も生かされているという残酷さも知り、加害者も被害者であると感じた。そこで、当時の被害者と加害者の子孫にあたる人々も名前を変えて共生しているため、それらの“伝え方”に関しての教育も大切であることを学んだ。他の研修先での話であるが、「ポル・ポトは国を守ろうとした強い人、しかしそのやり方が間違っていた」という言葉を聞いた。カンボジアは戦時中に日本を含め様々な国に植民地支配されていた国でもあるため、それはポル・ポトに対しての考え方が変わった瞬間だった。そして、ポル・ポト政権の残忍な行為を生み出した背景には日本の存在も隠し切れないのではないかと感じた。

また、ゴミ山の研修では、ゴミ山は環境や健康のことを考えるとそこにあるべきものではない、しかしそこで生きる人々の生活を考えた時に他で生計を立てられたら一番良いのだが、それができない現状があるため、100%悪だとは言えないというのが現実なのだと感じた。このように、一つの立場や見方ではなくもう一方から考えてみることで視野が広がり、考えも深まることを実感した。

次に、ボランティアとビジネスによる国際協力についてのディスカッションで、ボランティアという言葉についても改めて考えさせられた。以前から私は“ボランティア”は上から目線な印象のある言葉だと考えていた。そのことについてメンバーと話をした際に、ボランティアは上下の関係で手を差し伸べているイメージ、(国際)協力は横の関係で手を繋ぐイメージ、という意見をもらった。そして、自分たちのあたりまえを押しつけてはいけない、というのは、まさに私の中でのもやもやがはっきりした瞬間だった。それに加えて、suijoh の浅野さんのお話の中には、「ビジネスで現地の人に雇用を与えてあげているのではない、彼らのおかげで自分の雇用を生み出してもらっている」という言葉や、まだsuijoh が日本で展開されていないのは、「カンボジアと聞いて情けで買って欲しくない」といった現地の人々をリスペクトした言葉が聞かれた。

この8日間は、自分の目でたくさんものを見て、感じて、考え、とても濃い時間だった。これから人生でこの研修で得られた考え方を生かし、自分の成長に大きく繋げたいと思う。



【豊かさとは何か、本当の支援とは何か】

大分大学 経済学部 2年生

私は、ツアーでの最後のディスカッションテーマである「豊かさとは何か」「本当の支援とは」について改めて考えた。このテーマについて初めて考えたとき、すぐに自分の意見がまとまらなかった。

グループでは、豊かさは、「物の豊かさ」と「心の豊かさ」に分けられ、豊かさは人それぞれであると考えた。また、豊かさは連鎖するべきであると考えた。私は、ツアーを通して、カンボジアの現状、自分の現状に豊かさを感じ満足している人々に対して支援をする難しさを感じた。理由は、現地のニーズと私たちが行おうとしている支援の間にギャップがあれば、今あるカンボジアの人々の豊かさを壊してしまうかもしれないと考えたからである。私にとって今回のツアーは、カンボジアで暮らす人々の現状を知ることができた時間となった。首都のプノンペンの街並みと農村部の街並みを比べると生活水準の格差を感じた。プノンペンには、ビルや市場などがあり活気あふれる印象を受けた。それに対して農村は、人々が暮らす家が並び、動物も多く見られ自給自足の生活をしていることが分かった。しかし、そこに暮らす人々は笑顔で楽しそうに生活している印象を受けた。私は、「物の豊かさ」が必ずしも「心の豊かさ」につながるわけではないと考えた。

Sui-joh の浅野さんは、商品によってコミュニケーションが生まれると話した。商品を手にすることができる人々は、商品を手にしたことで「物の豊かさ」が生まれ、同じ商品を手をしている人々とコミュニケーションを取ることでその人の考えや経験を聞くことができる。それが、「心の豊かさ」となる可能性がある。Sui-joh の浅野さんのお話は、「物の豊かさ」が「心の豊かさ」へとつながり、コミュニケーションが生まれ顧客の「豊かさ」の連鎖につながった事例であると考えた。

しかし、「豊かさ」は人それぞれ水準が違う。例えば、日本人とカンボジア人の生活水準は、経済的格差などを理由に違うと考える。日本は、蛇口をひねるとあたりまえにきれいな飲み水が出てくる。カンボジアの農村部は、水に含まれる鉄分が多く尿管結石になる人が増えているという。どんな支援をすべきかの前に、人それぞれ違う「豊かさ」の水準を現地の人々は現状から上げたいと考えているのか、そこから考えるべきである。私はこのツアーを通して、「本当の支援」とは、現地で暮らす人々の考えを聞き取り、サポートできることがあれば進んでサポートに回ることであると考えた。このツアーは、私にとってカンボジアの現状を自分の目で確かめることができた時間であった。8日間で感じたことを今回できた仲間と今後も共有し、「本当の支援」について考えたい。



【カンボジア研修を通して】

大分大学 経済学部 2 年生

この研修を通して、カンボジアの事、途上国の事、支援の事、本当の豊かさとはなど様々な考えが参加する前とする後で大きく変わった。

まず、カンボジアの事では、途上国だからと言って車が無いとかではなく、プノンペンでは沢山の高級車が沢山通っており、建物も立派にたっており今まで自分が途上国に対する色眼鏡をかけていたという事が分かった。また、カンボジアでは教育も不十分だと思っていたが、私達より勉強の意欲があり、英語や日本語を話せる人が多いと感じた。これは、日本の事が大好きである事や将来の不安などに対する打破のためだと色々な所を研修して感じる事ができた。次に途上国については、貧乏だから幸せではないと思い込んでいた。しかし、農村の子も孤児院にいる子もみんな目がキラキラと光っており、新しいことに対する好奇心がとても伝わってきました。途上国は不幸せという感覚は捨てるべきだと感じた。むしろ、先進国より幸せではないだろうか？と思うほどみんなが笑顔で親切であった。次に本当の支援について考えた。本当の支援ではみんなとディスカッションもして、大きな課題として捉えた。ただ、支援と言ってモノを渡すのではなく、モノの使い方やどうすればこの先地元の人達が独立出来るかを考え支援する事が大事だと考えた。この時に必要な考え方として『魚を与えるのではなく、魚の釣り方を教えないと意味がない』というものがある。他にも沢山の物資の支援をしているところは沢山ある。しかし、その物資がいつも物資が必要な人に届いていないという事も、現状としてあり私達は本当の事実をちゃんと知れていないという事に気付いた。また、本当の豊かさについても話し合った。この話し合いはとても難しかった。日本人からしてみればお金、モノがなければ豊かとは言えないという色眼鏡がある。しかし、カンボジアでは実際は親や友達がいる事が一番の幸せであり、モノやお金は二の次だという事が分かりました。このように、私達の基準で、物事を考えるということはとてもしてはならない事であると気付かされた。カンボジアに行き今までの固定概念を捨てる事ができ様々な文化、価値観を知った。さらに、ポルポト政権においても知る事ができ、トゥールスレン収容やキリングフィールドに実際に行き肌で感じる事ができた。そこで自分がこの時代に生まれ、美味しいご飯を食べる事ができ、安心して寝れる場所があり、沢山喋り合う家族、友達が近くにいる事がどのくらい幸せなのか改めて感じる事ができた。

今回この様なスタディツアーに参加しなければ考えもしなかった事が沢山あった。

また、人に自分の意見を伝える事が苦手で直ぐに人の意見に流されていた自分がこのスタディツアーを通して、人と真剣に向き合い自分の意見を自分の言葉で伝える事が出来るようになり、成長する事ができた。さらに、人に意見をしっかりと伝える事はとても重要であると気づかされた。これからも、スタディツアーをここで終わらせるのではなく、様々な



経験に活かしていきたいと感じました。これが私にとって大きな成長の機会になったので本当に参加してよかったと感じた。



【豊かな発展途上国の持つ問題】

名古屋市立大学 人文社会学部 2年生

カンボジアの空港に到着して最初に思ったことは、暑いということと、とても人が多いということだ。参加する以前、私はカンボジアに対して発展途上国、田舎、貧しい、などのあまりいいとは言えない印象を持っていた。しかし、この八日間でそれらが正しくないことがわかった。プノンペン町をバスから眺めてみると高級な車が普通に隣に並んでいるし、道に植えられた木には意味があるのかわからないイルミネーションライトがぐるぐると巻き付けてある。一見日本の都会のような雰囲気を持っていた。

しかし、少し首都を離れると全く違った面が見えてくる。処理しきれない大量のゴミの山や尿路結石になるおそれのある井戸水を飲まなければならない地域。カンボジアはその全体が田舎で貧しいわけではなく、貧富の格差が大きいということが問題であるとわかった。それは教育面でも顕著だった。いくつかの教育機関を見学して、良い職につきたい、自分が家族を支えられるくらいお金を稼ぎたいと日本語を学ぶ人がいる一方、目の前の生活に手一杯で将来をよりよくすることなんて考えられない子供たちもいると知った。だけど、幸せの基準はそれぞれ違うし、どの子も今を楽しみ一生懸命に生きていることもわかった。

私はツアー中何度も、この国に本当に必要な支援とはなんだろう、そもそもこの国に支援は必要なのだろうか、と考えた。そして、やはり健康に生活するための最低の基準は存在し、それを超えるために何かしらの支援は必要なのではないかと思った。また支援する上で最も重要になってくるのは教育だと感じた。例えば、このツアーで見た孤児院のような教育設備を充実させるために日本がお金を出したり、人材を集めたりする。施設的环境が向上することで国の教育の水準が上がったり、施設の職員という職業の価値も上がり良い人材が育つようになっていくのではないかと考えた。

ツアー中に会った人の中にも教育に対して熱心に取り組んでいる方がいて、学びたい子にはきちんと学びを届けてあげたいという考えにとっても感銘を受けた。支援は、やってあげてを重視するのではなく、将来までを見据えた支援、カンボジアが自立していける支援が重要である。これは教育することと繋がるのではないか。カンボジアの持つ貧富の差という問題はすぐに解決できるものではないけれど、他国からの支援や正しい知識に基づいた教育によって少しずつ改善されるのではないだろうか。何十年後かには、子供たちが安心して学校に通える環境やゴミ山がなくなってそこでゴミを漁らなくても生活していける環境が整っていることを願う。

最後に、カンボジアはとても素敵な国だった。食べ物は私の口に合わなかったけれど、人は優しいし、学校は活力にあふれているし、アンコールワットという世界に誇るべき遺産もある。いつかまた訪れて TAYAMA の生徒と日本語で会話したり、農村の子供たちと井戸の水を一緒に飲んだりしたい。

【幸せとは何なのか】

同志社大学 文学部 2年生

私は8日間のカンボジアでの研修を通して、改めて幸せとは何なのかを考えさせられた。お金がたくさんあれば幸せなのか、友達がたくさんいて家族がたくさんいるのが幸せなのかなど様々なことを考えてきた。ただ、この研修を通して、幸せとは一通りではなく、その人それぞれの主観や場面によって変わるものであり、漠然としたものではあるが、人の心の中にしっかりと根付いているものだと感じた。ただ、そう思いつつも、もっとより豊かな幸せを国として築いていけないのではないかと感じた。私がこう思うに至った経緯についてを後述する。

まず、研修の初日に訪れたSui-Johというカンボジアの企業の日本人起業家である浅野さんの話を聞いた。その時に聞いた話で、「カンボジアの人はお金がない人もいるが、だからといって決して不幸であるという訳ではない。お金が無くても心が豊かな人がたくさんいる。」とおっしゃっていて、今まで自分が考えてきていた幸せというものが物凄く狭い価値観の中のものだと感じ、幸せのベクトルというものが決して一通りなものではなく多様性のあるものだと感じた。実際に話を伺った日の夜にプノンペン市の街の雰囲気を見た時に、確かに日本のような綺麗で整然された街でもなく、衛生的に問題のある部分も多くあるが、日本と比べて多くの方が家族で夜ご飯を食べていたり家族でちからを合わせて生きている姿はとても心が豊かしているし、現代の日本に欠けている豊かさであると感じた。

もちろんカンボジアには今の日本に欠けている傾向にある家族との交流が盛んであるという心の豊かさがあるというのはプノンペンやシェムリアップというベトナムの市街地を見て感じたが、その一方で日本と違って水の整備が整っていなかったり、高血圧や糖尿病の発生率の高さなど健康に生きていく上で必要な最低限度の要素が整っていないようにも農村でのチアドルさんの話やHOPE医療センターでのお医者さんの話を聞いて感じた。実際にシェムリアップの農村では濾過システムが整っておらず、農村の人たちは尿路結石などの症状に陥ってしまうと話していた。また医療センターで聞いた話だとカンボジアの国民はカンボジア国内の医療技術を信頼しておらず、複数の病気を抱えてからやっと病院に行き、富裕層の人は隣国のベトナムやタイなどに行って医療を受けるとおっしゃっていた。この2つの話を聞いて私はカンボジアにはもっと必要最低限のインフラの整備が必要なのではないのかと思った。人というのも一人一人が大切な資本であり、永久的に高度なパフォーマンスが維持出来る資本でもないで、常にメンテナンスは必要であり、そのためのエンジンである綺麗な水や安心安全な食事や産業発展の維持のための医療の発展というのはカンボジアにとっての大きな課題であり、心の豊かさものの豊かさの両立のために欠かせない要素であると感じた。そのためにもまずは政府がお金を国を発展させるための、産業の発展のために多くのお金を使うのではなく、産業を継続して発展させるための水の濾過システムの整備や医療の発展にお金を割くことが重要だと考える。

私はカンボジアに来る以前は、カンボジアという国は貧困な国で、インフラなども全く整っていない国だと思っていたが、それはある一面から見たカンボジアという国でしかなく、他の側面からこの国を見た時にこの国はとても発展しており、日本の一部分の地域と比べても、都心の発展具合は凄いものを感じた。

豊かな部分も多くあり、とても個性ある街であり、実際に産業の発展というものも著しいものがあるので、以前日本が経験した高度経済成長期の公害のような過ちを犯してほしくないのもっと積極的に海外のことも吸収していき、誰も傷つかない成長をしていくべきだとも感じた。

最後に、カンボジアの現状の問題点を多く述べたが、これらを含めてもカンボジアでは多くの幸せというものは依然としてあり、ものの多い幸せと心の豊かさというものが両立し得るものであると思うので、ものの多い幸せという側面を知ってもらい、より国として幸せな国としてあって欲しいと思った。

必要最低限を整えることが出来れば、とても魅力的であり、幸せ溢れる永住したいと思われる国になっていけると感じた。